
魔女のご主人様

岡屋いまき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女のご主人様

【Nコード】

N2254W

【作者名】

岡屋いまき

【あらすじ】

黒髪黒目の魔女として生まれたシャリは、王宮で嫌悪されつつも生きていた。猫の姿に変化して散歩していたシャリはゴトルーという大きな男に出会い、寝ている間に彼の屋敷へ連れ帰られてしまう。けれど一度は王宮に戻ったシャリだったが、ゴトルーの所へ降嫁する事になり……。

タイトルはご主人様ですが、主従関係の話ではありません。

*改行と隙間を増やしてみました。

そんなわけで、全部（改）です。

どちらが読みやすいでしょうか？

再読に来てくれた方がもしいたら、文の間が空き過ぎでビツクリ

@
@;?

始まり（前書き）

初めての投稿です、よろしくお願いします。

ひたすら都合良く進む為、辻褄の合わない点がありますが、
ご了承下さい。

ですが誤字脱字・感想等、頂けましたら喜びます。

始まり

ラーシカ王国で黒は魔の色とされている。

黒髪、髪よりは色がやや薄いものの黒に近い瞳を持つシャリは魔女だ。

魔法使いの女という意味ではなく、魔の色を持って生まれた女だった。

今年十六になるシャリの外見は正に、絵本に出てくる悪い魔女と同じだった。

ぼさぼさの長い髪、細く血色の悪い手足の表面はカサカサとして、背は低い。

そして極め付けに目だけがぎょろりと大きかった。

この外見は人間にとっても似ているが違う、更に鳥や猫といったものに変化出来る様になってから、シャリは確かに自分が魔女だと思う様になった。

シャリには本来もつと長い名前があったはずなのだが、呼ばれた試しがなく覚えていない。

王宮で衣食住の提供を受け、生かされている。

病気や事故で死んでくれればいい。

故意に殺して、呪いでも降り掛かっては困る……そんなところだ。

王宮の庭はとても広い。

シャリはいつも暇になった時、猫の姿に変化して気の向くまま散歩をし、時に寝転んで日向ぼっこをする。

変化する為には魔力が必要であり、それは夜になると日中よりも回復が早い。

夜空が綺麗で、星や月が美しく輝く日には特にその実感があつた。

なぜ猫の姿かというと、それが丁度良いからだ。

猫以上に大きいと、その分魔力を消費するし、人に見つかった場合、必要以上に騒ぎ立てられ、武器を持ち出されてしまう。

シャリは悪意さえ持っていないのに、だ。

そして猫より小さいと、本物の猫や蛇等に狙われる。

本物の猫とは王宮の庭を徘徊し始めた頃に、よく喧嘩をした。

今でもたまにどこかで飼われ始めたか、紛れ込んだ新入りの猫と喧嘩する事があるけれど、完全連勝している。

いつの間にか猫達の間で、あいつは自分達とは違う奇妙な生き物だから手を出すなという暗黙の了解が広まったらしく、滅多に絡まれなくなった。

地面を歩く時、基本は猫の姿だが、魔力ある限りそこは臨機応変

にやっている。

そして王宮で徘徊する黒い動物はシャリ本人ではなく、魔女の使い魔だと囁かれていた。

当然ある魔女への嫌悪や蔑視、嘲笑。
悪意ある言葉の数々。

それらが変化している時にだけ、ほんの少し自分に向けられているものではなく感じられた。

出会い（前書き）

早くも会っちゃって、すみません（笑）

出会い

何年も王宮の庭を歩けば、お気に入り場所がいくつか出来る。
そのうちの一カ所でぬくぬくしようと思い、やって来たのだが……
先客がいた。

胡坐を掻いているというのに、大きい。

立てば、元の姿のシャリよりも頭二つ分は背が高いのではないか
と思えた。

手はゴツゴツとし、全体的に華やかな騎士という言葉よりも、武
人というイメージである。

髪は錆掛けた銀、どうもあまりの大きさにマジマジと見てしまっ
たらしい、気付いたその男がシャリに視線を向け、ぶつかった瞳の
色は月明かりの青。

大きな男の目に驚きは浮かんでいるものの、決してそれが厳しく
ない感情だと知る。

だが別にぬくぬく出来る場所は他にもあるのだから、ここに留ま
っている必要はない。

視線を逸らし、シャリがこの場を離れようとした時、男がポンポ
ンと自分の横の地面を叩いた。

黒が魔の色である事は小さな子供から老人まで知っている事で、

そんな色を持つ自分を横に招くなど、どういうつもりなのだろうと、再びシャリは怪訝な気分で男を見た。

「……」

「……？」

その表情を見て、シャリは余計に困る。

ただ図体が大きいだけではなく、黙っていれば精悍さを通り越し、十中八九、怖いもしくは虫の居所が悪いに違いないという印象を持たれるだろう強面。

たぶん三十後半、もしかすると四十も越え……いや明らかに老け顔なので、実際の年齢はもっと若いかも知れない。

が、とにかくそんな男が「こっちにおいで」の「こ」の字もないのに、普段使っていないさそうな表情筋を精一杯動かして、シャリを呼んでいるのが分かった。

本人は優しそうな顔を作ろうとしている様だが、それが分からないければ思わずドン引きしているだろう非常に奇妙な表情となっている。

なぜここまで呼び寄せたいのか理解に苦しむが、その必死さに免じて、シャリは男の横に寝転んだ。

ぬくぬくさが気持ち良くて、とろんとなり掛け、急に心配になる。使い魔と仲良さ気にしていたと誰かに醜聞を立てられでもしたら、大変な事になるのではないだろうか。

顔を上げ、そわそわと周囲の様子を窺った。

いつもの事だが、騎士団の鍛錬の声が聞こえて来るだけで、近くに人の気配はないと安心し、シャリは横の大きな男を見上げる。

王宮に勤めている以上、使い魔と関わる事がマイナスにしかない事ぐらい、この男だって分かっているはず。

それに見ただけで判断するなら、誰かの気配が近寄って来たなら、すぐそれに気が付くだろう。

そして自分から去って行くに違いない。

だからこの男の心配を自分がする必要はないと、シャリは結論付けた。

シャリが頭を下げると、おずおずと大きな男が手を伸ばして来た。機嫌を損ねて逃げ出されるのを恐れるかの様に、そうっと黒い毛並みに触れられる。

他の猫や犬が撫でられているのを見た事はあったが、実際にされるのは初めてだ。

ああ……思いの外心地好くて、シャリは目を閉じた。

初会話（前書き）

前話と違って、長いです。

初会話

目が覚めてみると、シャリは王宮の庭ではなく知らない場所にいた。

室内で、しかも窓からの光で察するに、日が傾いている。

少々うとうとするだけのつもりが、かなり深く眠ってしまったらしい。

柔らかな肌触りのいいタオルの上に起き上がり、室内の様子を窺った。

まず猫の姿のシャリが包まれたタオルは寝台の上に置かれていた。

泥の中を歩いてはいないが、土は付いているだろう、足を出すには躊躇われるほど白く洗い上げられたシート。

シャリの部屋よりも広く、きちんと整理整頓と掃除がされている。

非常に汚し辛い。

これなら魔女の使い魔に相応しく、タオルなしで小汚い箱にでも入れ、部屋の隅に置いてくれた方がまだマシだった様な気がする。

しかも重大な問題がある。

シャリが変化していられる時間はもう残りわずかだろう。
魔力が尽き掛けて……というより、尽き様と……、尽きた。

一瞬で姿が元に戻る。
当然服はなく、裸だ。

とりあえず申し訳ないとも思ったが、シーツを引っぺがし、頭だけが見える様に被る。

髪の毛は隠さなかった。
目の色もそうだが、黒は魔女の証。

例え使い魔の事は知らなくたって、いくら何でも魔女として生まれた姫の話くらいは聞いた事があるはずだ。

姫を攫うのが目的なら、どんな目に合うか分からない魔女などより、真正銘深層の姫である姉妹を標的にしただろうから、その点は心配していない。

小さな音を立てて、扉が開いた。

さすがに緊張するが、ひょっこりという擬態語は絶対に使っても
られない大きな男が現れた。

シャリがこの人で良かったと思った時、男の方は片手に持っていた、たぶん猫用のご飯とミルクを手から落として床にぶち撒ける。

「だっ、旦那様？　ゴトルー様、いかがなさいました……？」

大きな男、ゴトルーの後ろから知らない人物がシャリの方を覗き見、

「！魔、もごっ、もごごごごっ？」

魔女と言おうとして、ゴトルーに口を塞がれた。

とりあえず、このまま睨み合っているわけにもいかない。

「申し訳、ありません。私を……王宮へ。帰して、頂けないでしょうか？」

「……」

「……」

「……あの。お手数を、お掛けしますが。出来れば、その前に……服も」

これまで猫の姿で威嚇の声を上げたり、鳥で歌ったりはあったが、人の言葉を話すのはもしかすると始めてかも知れない。

ちゃんと聞こえる様にシャリは頑張ったつもりだが、唐突にゴトルーがもう一人を押し出す形で一緒に部屋から出て行き、扉が閉まった。

そして二人が大急ぎで遠ざかって行く足音が聞こえる。

「……」

どうしよう。

悪い人ではないと思ったのだが、勘違いだったのかも知れないと
シヤリは不安に思う。

でも鍵は掛けられていないし、ご飯も用意してくれていた。
窓だってあるのだから、魔力さえ戻ればいつでも逃げ出せると考
え直す。

外へ出れさえすれば、きっと王宮が見えるはずだから、魔力が溜
まるまでの辛抱。

ただ王宮へ帰る時間が遅くなればなるほど、部屋にシヤリがいな
い事で一騒動おきそうだ。

内心はいなくなって清々したと思われてしまいそうだが……。

その時、扉がノックされる。

「……どうぞ」

「失礼いたします」

頭を下げたまま、年嵩の女性が部屋へ入って来た。
手に持っているのは女性用の衣類等一式だ。

たった一人で魔女に近付いて、恐ろしくないのだろうか。

「こちらのお屋敷には未婚の娘がおりませんので、このような物しか
なくて……。これをお召しになられてから、マントを羽織って下

さいまし」

申し訳なさそうに、その女性は言ったけれどとんでもない。

確かに襟から靴まで、少し大きそうではある。

しかし落ち着いた色合いできちんと染色がされ、細やかな飾り気もあった。

シャリが普段着ている物よりも断然いい。

「ありがとうございます。とても、……助かります」

「お手伝いいたしましょう」

その自然と言われた言葉にシャリは驚く。

王宮に勤める女官達は決して魔女に触ろうとはしなかった。服の形状をざっと見て、シャリは答える。

「いえ。大丈夫……です」

「姫様、ご遠慮なさらずに」

「私は姫、ではなく、魔女ですから。服を、着るくらい……」

「……。……それでは部屋の外でお待ちしておりますわね」

何だか魔女である事よりも、一人で着替えられる事に驚かれた気がした。

猫とはいえ、黒をお持ち帰りのゴトルーといい、今日は奇妙な日だとシャリは思う。

だが、ぼうっとしては時間が勿体無い。

急いで帰れば夕食の時間には間に合いそうだから、マントを着ている事を不審に思われたとしても、シャリが王宮にいなかった事を、気付かれずに済むかも知れない。

手早く衣服を身に付け、髪だけは見える様に胸へと垂らし、深くフードを被って部屋を出た。

「あの、これ……。それとタオルと、シーツに、土が」
落とされたままの、猫用ご飯にシャリは視線を落とす。

「ゴトルー様の粗相ですもの、姫様がお気になされる必要はございませんよ。さあ、お急ぎ下さいませ」

「……すみません」
嫌な顔一つせずに答えてくれた年嵩の女性に、シャリはぺこりと頭を下げて、付いて行った。

「姫、こちらへ」
玄関でゴトルーが呼んでいる。

そういえば始めて声を聞いた。
太い喉を通して発せられた響きは静かで低かった。

ゴトルーがシャリに手を伸ばして来て、これを取るべきものなのだろうか戸惑う。

どうして今日は今まで有り得なかった奇妙な扱いばかりをされるのだ。

シャリの戸惑いをどう思ったか、ゴトルーが言う。

「よろしければ、手を。私は貴女の色など気にならない。 そうなら連れて帰ったりはしないでしよう」

「……でも。もし、本当に……呪いが、掛かってしまったら」

「私は眠る貴女を懐に入れましたよ。 手ぐらい今更だとは思いませんか？」

「……」

ゴトルーの手のひらの上に指先だけを載せると、そっと握られた。そして馬車に乗り込むまで、そのままだった。

斜め向かいに座るゴトルーはシャリがつい可笑しくなってしまうくらい、かなり窮屈そうである。

そんな状態にも関わらず、真剣な表情でゴトルーが言った。

「申し訳ない、姫。 貴女がいらっしゃらないと、もう王宮で騒ぎになっているはずですよ」

「まだ、そうとは……?」

「屋敷へ帰る前、私が貴女に使い魔を一匹下さいという手紙を出してしまった」

「……えっ」

シャリは驚いた。

たまに家や領地等で不幸や災害が起こると、それが魔女のせいだと呪いの手紙を寄越して来る者があり。

その手紙を検閲した者が重い病に掛った事が何度かあった為、シヤリへの手紙はそのまま部屋に届く。

だからゴトルーの手紙が誰かに見られる心配はないのだが、使い魔が欲しいなんていう内容の手紙は一度も来た事がない。

「本当にすまない。私があそこで、きちんとお願いを先にしていれば」

「あの、そうではなく。使い魔だと……承知の上で、連れて、帰られたのですか？」

「とても可愛らしく。例え使い魔だろうとも、生き物に対してこんな風を感じるのは初めてで、我慢出来なかった。だから貴女が今の姿で寝台に座っていたのを見て、私は……」

そこでゴトルーは言葉を途切れさせる。

「……がっかりさせてしまい、私の方こそ、すみません」

「……。……いえ」

謝り返したシャリにゴトルーは何か言いたそうにしていたが、返された言葉は短かった。

とにかくゴトルーはシャリを使い魔としか見ていなかったし、

更に世間一般から見ればかなり悪い趣味だが、魔でも可愛いと思っ
てくれた事には違いない。

「……私は。見知らぬ誰かに、攫われた事にします。逃げ出すの
に、魔力を使い果たし……彷徨っていた所を、貴方に保護された」

「だが……」

「王宮を……徘徊している、使い魔。が、実は私本人だと知られて
しまったら、光も射さない場所に、閉じ込められてしまう……かも
知れません。ですから、口裏を合わせて頂けませんか？」

確かに苦しい話だが、誰にも本当の事は分からない。

「王族をかどわかした罪に問われず、私は助かりますが。しかし
貴女が何を言われるか」

「ご心配、には及びません。私は魔女ですから、噂の一つぐらい。
かえって、……箔が付くくらいです」
何て事はない。

すると馬車がゆっくりと止まった。

「着いた様ですね。ここから王宮まで少々歩きます」
「はい」

王宮の庭の一角で馬や馬車を止め預け、王宮の建物には自らの足
で出向かなければならないのが、身分に関わらずの決まりとされて

いる。

こうして元の姿の足で歩くのは初めてだが、それをシャリは知っていた。

「一人で、降りられます。少し離れて、付いて行きますから」
並んで歩いたら、それこそゴトルーが何を言われるか……。

だがゴトルーはシャリに手を伸ばして来た。

「可能な限り、お送りしたい」

「私と、一緒に……顔を広めても、マイナスにしか……」

「そんな事を目的にしてはいないし、辺境にトンボ返りさせられるなら、それで構いません。むしろ王宮勤めよりも私の性に合っている」

確かに、ゴトルーは見るからにそんな感じなのだ……それでも。
これは我儘だと自覚しつつ、シャリは言う。

「魔でもいいと、言ってくれた貴方に。 私は……王都にいて欲しいと、願います」

「……願い、ですか？」

「はい。叶えて、下さいますか？」

「……。……分かりました、ここは貴女の仰る通りに」

シャリは内心、ほっと安堵のため息をついた。

本当に長く喋った、と思う。

部屋に戻るとゴトルーからの手紙が届いており、封を開いてみると本当に使い魔云々と書かれている。

誰に見られるか分かったものではないので、すぐ燃やしてしまった。

初会話（後書き）

つまりゴトルーはシャリに、ふおーりんらぶです。

約束（前書き）

長さ戻ります。

約束

攫われた女の辿る道として……。

攫った相手に犯された。

いや、犯される前に。

いやいや、やはり状況を利用して、存分に肉欲を満たした後で相手を呪い殺した。

とにかくシャリを攫った架空の誘拐犯は、生きたまま使い魔に食われた、激痛苦痛を伴いながら塵にされた等々と実しやかに囁かれている。

それは予想通りだったのだが、結果的にシャリを助けた事になっているゴトルーの話題も上がってしまった。

王都から見て北西に位置する国境にターブ地方があり、隣国との小競り合いに勝利し、一代限りの爵位を与えられた。

家名はカジユ。

一代限りの男爵なので、あくまでも領地ではないが、元々ショウプという地区の名士であるらしい。

つい最近、国王への謁見に訪れ、その実戦経験を見習い騎士に伝え指導する為、王都に残っている大男。
まるで見えないが、三十一歳独身。

だが、一代限りの爵位というせいで女性達の口は厳しく、ゴトルーは生粋の貴族ではない田舎者。

だから魔女など助ける気になったのだ、と悪く言われている。

本物の姫君を救い出していたなら、きっと誉め称えられているだろうに、シャリは申し訳ない気分でいっぱいだった。

王宮内に流れている今回の件の噂話は粗方聞けた。

シャリはお気に入りのお場所に出席してみようとした。

ゴトルーも来ているだろうか？

もし来ているなら、謝りたいと思う。

だから足はあの場所を目指していたが、実際にゴトルーの姿を目にした途端、ウツと立ち止まってしまった。

今後の事を考えるなら、例えば猫の姿だろうが、接触はしない方がいいに決まっているからだ。

シャリが回れ右をしなかったのは、瞬間ゴトルーが逃げたら捕まえるまで追い掛け回してやる的な気配を発したからだ。

逃げるだけならシャリの方が断然有利なのだが、その光景を誰かに見られるのは絶対にマズイ。

何より、その気配。

ゴトルーが怖いと思ったのは始めてだった。

だが会うのは二回目で、時間も短い。
だからきつとシャリは、ゴトルーのほんの一面しか知らないのだ
ろう。

「余計な体力を使わずに済みました」

横に座ったシャリに、ゴトルーがそう言うのを聞いて、先程の気配が自分の気のせいなんかではなかったと知る。

残念ながら動物に変化している時、それに見合った声しか出せないが、シャリは謝罪を込めて一言鳴いた。

それはちゃんとゴトルーに伝わったらしい。

「大丈夫です。貴女の噂に比べれば、事実ですから」

それでもやっぱり……と思っていると、ゴトルーが続けて言う。

「聖水漬けにされたり、聖言攻めにされたりという事ありません。
ちよつとした有名人気分です」

全くそうは見えないが、もしかしたらゴトルーにすると、軽口か冗談のつもりだったのだろうか。

「きつと別れ際の態度も良かったのでしよう。だから私の事で貴女が気に病む必要はありませんよ」

ゴトルーの言葉は優しく、きつと元の姿であってもシャリは何も言えなかったに違いない。

ゴトルーが悪し様に言われるのは絶対に間違っている。
これ以上はもう。

ここに長居は無用だと改めて思い、シャリが立ち上がろうとした途端、ゴトルーにまさかの先手を打たれてしまう。

「そんなに人目に付きたくないのでしたら、横ではなく……ここに」
「……っ？」

そして軽々と抱え上げられたかと思ったら、胡坐の上にシャリは乗せられていた。

確かにゴトルーの大きな背で陰になっている分、いい場所なのかも知れないが。
だからってどうなのだろう、ここは……。

しかし飛び下り様にもゴトルーの手の内でもがくだけという結果に終わる。

シャリは抗議の声を上げた。

「大丈夫ですよ。ここへ人が来ないのは貴女もよくご存知のはずだ。もちろんちゃんと警戒はしておきます。これ以上暴れるなら、抱き締めてしまいませんか」

それもいいですね……とゴトルーが言いながら、片手でシャリの動きを封じつつ、もう一方の空いた手で毛を撫で始める。

シャリの元の姿は人とはぼ変わらないのだが、もしかするとゴトルーの目には猫としか映っていないのかも知れない。

いや、きつとそうだ。

そうでなければ、元の姿で今の状態を想像すると非常に恥ずかしい。

今は撫でられるままにしてゴトルーを安心させておいて、鳥か、もしくは小さい鼠にでもなって手から逃れれば……。

そう考えつつもゴトルーの手は心地好く……駄目これじゃこの前と同じ……だと抗おうにも襲って来る睡魔には勝てず、シャリの瞼はいつしか落ちた。

……

……

………声が聞こえる。

頬を撫でられて、くすぐりたい。

なぜ？

ようやく深く眠れそうなところなのに。

「……下さい。起きて」

「ッ！」

今、耳に。

息が、掛った。

低い声が直に鼓膜を刺激し、シャリは一気に覚醒した。
既にゴトルーの顔は間近になかったが、まじまじと見つめる。

「休憩時間が終わりそうです。……ああ、随分アツサリ退かれてしまったな」

そんな残念そうな声を出されても、終わりなら仕方がないだろう。

「そうですね。ついこの前サボったばかりなのに、立て続けというのはさすがによろしくない。では、また」

「……」

「また、ですからね」

念を押されてしまった。

去って行くゴトルーの後ろ姿を見つつ、元の姿以外の時でも意思を伝えられたらいいのにとシャリは始めて思った。

約束（後書き）

ゴトルーの脳内でシヤリは元の姿かも。

ため息（前書き）

短いです。

ため息

何度かゴトルーの胡坐の上で短い昼寝を繰り返して、気が付いた事がある。

夜、今までよりもしつかりと起きていられ、その状態で月や星の光を浴びると魔力の回復が早く感じた。

更には変化時間も長くなっている気がする。

もうじき猫や鳥の様に変化に慣れたものならば、半日はその姿を保っていられる勢いだ。

ただ問題は一人で昼寝をしても、効果が今一つという点だった。

ゴトルーに撫でられると途端に睡魔が襲って来るので、その手に理由があるのではと、ペしペし叩いてみる。

が、分からない。

「……何でしょう？」

ゴトルーが怪訝そうにしているが、首を傾げたいのはシャリも同様なのだ。

猫の手だから問題なのかも知れないと、人差し指を舐めてみた。

「汚いですよ？ さっきから何を……。……」

これは汗の味、だろう。

そのままぱくりと指先を咥える。

それから金属、剣の柄だろうか……？

猫の口ではなかなか大変だ。

とにかくこの手に力は宿っていない気がする。

断言出来ないのは、いつも感覚だけで魔力を使っているせいだ。

シャリには魔力の師がない。

完全な自己流である。

今回の様な疑問にぶつかった時、たまに師が欲しいと思う。

それから感覚だけで行っている変化は、理論で述べるとどうなるのだろうか？

間違いは正し、教え導いてくれる存在が欲しい。

でもシャリは自分以外の魔女に会った事もない。

とりあえず今回の疑問も謎のままになりそうだと、シャリは諦めて口から指を離した。

するとゴトルーに視線が合う高さまで持ち上げられ、剣呑な光とぶつかった。

気を付けていたつもりだったが、痛かったのだろうか？

それなら謝った方がいいのだろうか、それとはどうも違う気がする。困惑していると、ゴトルーの強面が急に近付いた。

そして額が合わさる。

「貴女が何のつもりでああしていたかは知らないが、私の思う事とは違うのだろうか」

ため息を長く吐き出す様に、ゴトルーが呟いた。

距離が近過ぎて、どんな表情をしているのか、シャリには見えなかった。

ため息（後書き）

ゴトルーがモンモンです。

降嫁当日・朝（前書き）

少し長いです。

降嫁当日・朝

シャリに王宮退去命令が出たのは突然だった。

追い立てられた馬車の中で、シャリの部屋はどうなるのだろうかと思う。

荷物をまとめる様にと言われた小さな袋に、当然家具は入らない。

入らなかった物は全て捨てられ、立ち入り禁止区になるか、それとも懲罰部屋にでもなるのか……。

華やかでも可愛らしくもなかったが、長く使って愛着もあったというのに。

昨日の時点でシャリの身柄をどうこう等という話は出ていなかった。

という事は朝にしても早過ぎるから、昨夜遅くに急遽決まった事だろう。

予めシャリに知らせて対抗措置でも取られたら迷惑だと、即実行に移されたに違いない。

全く買い被りも甚だしい。

それほど魔女が畏怖されているという事なのだろうか、それにしても……とシャリはため息だ。

荷物を持たされたと言う事はまだ生かされるのだろうか、しかしどこへ連行されるのだろうか。

生かされる以上、シャリのやる事は変わらない。

来なくなったシャリを、きっとゴトルーはいぶかしむ前に、噂話で耳にするに違いない。

だから、待ちぼうけをさせる心配はない。

もう会う事もないから、「また」の約束を破ったと怒られる事もない。

魔女を助けたと押された烙印もシャリ本人がいなくなる事で、薄れていって欲しい。

ゴトルーの中にあるシャリの記憶も同時に……それはとても喜ぶ事で、寂しい等と感じてはいけない。

いつも通りに日々を過ごす、それだけだ。

とりあえず行き着く先を見てみよう、と大人しく座っていた。

王宮から出された以上、王都からも追放されるのではと思っていたのだが、意外にもそう掛らない内に馬車はゆっくりと速度を落とし、そして止まった。

察するにまだ貴族屋敷区内だろう。

この間、ゴトルーの屋敷から王宮へ戻った時、正にこれくらいの感覚だった……気が、する。

「……」

不安がシャリの口から零れ落ちる前に、馬車の扉が開かれた。

すぐそこにある一度だけ見た屋敷の外壁の色。

シャリは動きたくなかったが、「降りろ」と無言のまま顎で示され、シャリはゴトルーの屋敷の玄関の前に足を付けた。

もうゴトルーにこれ以上の迷惑を掛けてはいけないと思っているのに、今日は一体どうしてこんな事になったのかが分からない。

状況がサッパリ飲み込めないシャリを置いて、馬車は去って行く。

「シャリエゼーラ様、貴女様はゴトルー様に降嫁されたのですよ」
服一式を貸してくれた女性の声だと思うが、シャリは顔を上げられなかった。

物凄く久々に聞いた長い名前は、結婚とセットだった。

「……このたびは、お詫びのしようも、ございません」
シャリは荷物を地面に下ろした。

「魔女との……結婚話は、一生付いて回ってしまう、とは思いますが。絶対に。もう……っっ」

深々と頭を下げて、シャリは鳥の姿へと変化する。

長時間変化可能になった時点で、そうすれば良かったのだ。

王宮で何となく生きていけていたから、惰性でそのまま居続けてしまった結果がこれだ。

きつとゴトルーの人生で、これ以上の迷惑は有り得ない。

とりあえずどこか適当な……人けのない、水のある場所が望ましい。

空を飛んで、そのまま国も出てしまおう。

そうシャリは意気込んで羽ばたいた、のだが……。

「咎められます！ わたくしが！」

その声の内容に、引き留められた。

「どうぞわたくしを助けると思って、お戻り下さいませっ！」

「そうですよ！ 旦那様は死ぬ気で引き留めておくと、我々にお命じになりました。ゴトルー様がお帰りになられて、シャリエゼーラ様がいらっしやらないと分かったら、鞭で打たれるかも知れませんが……」

こう言ったのは始めてこの屋敷に来た時、ゴトルーの後ろにいた男性だった。

それにしても鞭打ちだなんて、本当なのだろうかとシャリは疑う。

すると女性の方が嘆いた。

「ああ！ 折檻など、わたくしの身では耐えられません。どうか、どうか……」

最後には声も小さく、崩れ落ちてしまった。

そして男性からの決定的な一言。

「シャリエゼーラ様をご存じかどうか分かりませんが、旦那様には恐ろしい一面があるのです。意に副わなかった者には非常に容赦のない方で……！」

「……」

確かにゴトルーは外見だけでなく、時々怖い。その事をシャリは短い間に知っていた。

鳥から猫の姿へと変化して、地面に着地する。

女性の方が脱げてしまったシャリの服一式を、男性がシャリの荷物を持ってくれたので、捨てて行くものだったのにごめんなさいの気持ちで、一声鳴いた。

「ゴトルー様からのお咎めを受けずに済むのですから、これくらいお安い御用ですわ。やはりお優しい方ですね、シャリエゼーラ様は。申し遅れましたが、わたくしの事はユイナとお呼び下さいまし」

「そうでした、自分はホルマと申します。お部屋へお持ちしますから」

自己紹介までもしてもらい、二人に付いて行った部屋は始めてこの屋敷に來た部屋の並びの部屋だった。

どう見ても客間ではなく、私室用に作られた部屋である。

元の姿に戻った頃合いを見計らったかの様に、お茶を持って来たユイナにシャリは尋ねた。

「ここで、あの方を……お待ちして、よろしいのですか？」

「もちろんでございますよ。今朝、シャリエゼーラ様が我がカジュ家に嫁がれて来ると伺って、慌てて整えはいたしました、少々殺風景ですわね。花でも活けて参りましょう」

「い、いいえ。お茶だけで……、充分ですから。私が……どうして、ここに降嫁となったのか。ご存知でしたら、教えて下さい」

「それはわたくし共も存じません。降嫁の旨を携えた使いの方が朝一に御出でになり、今頃ゴトルー様が王宮で、今回の理由を伝えられていらっしゃるのではないのでしょうか」

「そうですか。……あの。すみません。この間、お借りした……服一式。お返し出来なくて」

日々準備されている生成色の服と同じ末路で、きつと灰になってしまっただろう。

「あれはもう差し上げた物と思っておりましたので、大丈夫ですよ。そうですわっ、急いでシャリエゼーラ様の新しいお召し物を準備いたしますわね！」

「え……っ？」

妙にはしゃいだ声を出すユイナに、シャリは大慌てで首を横に振った。

「私はあの方との……お話が、済み次第。出て行きますから」

ところがユイナは考える様に言って来る。

「……。……ゴトルー様はきっとシャリエゼーラ様のお気の済むままで、屋敷に滞在させると仰るはずです。どうかお願い致します、ご意思に反すると重々承知しておりますが、頷いて頂けませんか？」

「私の……。変化時間は、長くて半日程です。あの方が、お望みなのは猫で、魔女ではないかと」

「それはどうでしょう。シャリエゼーラ様はどこか行く当てがおりになるのですか？ どちらへ飛んで行こうとされていらっしやったのです？」

「……。全く、何も。とりあえず王都からは出て、人けのない所に……。くらいでした」

「では交換条件をいたしましょう」
「？」

「シャリエゼーラ様はもしゴトルー様が猫の姿以外でも構わないと仰ったら、この屋敷に留まって下さいませ。その代わり、二度も続けて厚かましいお願いをするわたくしは、決してシャリエゼーラ様に不自由な思いはさせません。」

それからすぐには無理ですが、近隣の地図や情報を出来うる限りお持ちします。そして出て行かれる日がもし来たならば、可能な限りお力添えいたしましょう」

生きる事を目的にするなら、行き当たりばったりに気の向くまま

飛ぶよりも、何となくでも目的地があった方がいいに決まっている。

しかし、これは本当に交換条件と呼べるのだろうか？

シヤリはただ、カジュ家に留まっているだけでいいのだ。

「……それでは、あまりに私の方が、楽。では？」

「わたくしはこの条件で構いませんの」

シヤリは困惑したが、結局頷く事にした。

そもそも、それもこれも。

「あの方が、魔女で構わないと……仰るなら」

「承知して頂けて、嬉しゅうございます。 わたくしは下がらせて頂きますが、ゴトルー様がお帰りになるまで、屋敷内や外を見て回られてはいかがでしょう？」

「……」

「ゴトルー様も極力ご自分でなされる方で、元々王都には長居をする気がなかったものですから、屋敷には人が入っていないのです。

わたくしもホルマも、それからサッドという料理人がおりますが、黒だからといって嫌悪する愚か者などおりません。

通いの者や商人と出くわす事があるかも知れませんが、国の命でシヤリエゼーラ様は嫁がれて来たのですから、この屋敷にいて当然なのです。 何の不思議もないのですから、ここにいらっしゃる事でゴトルー様やカジュ家が迷惑を被る事はありません」

ユイナはそう断言して部屋を出て行ったが、シャリはその反対だ
と思う。

この屋敷には魔女が住んでいる。

ゴトルーは魔女を花嫁にした等々、報復を恐れて表立った嫌がらせはなくても、陰口は確実に叩かれるに違いない。

確かにじっとゴトルーを待っているのは暇だったが、かといって本当にカジュ家に留まるかも分からない状態で、ユイナの勧め通りに屋敷の内外をうろつくのは以ての外だった。

そして部屋にもう一つある扉に何が入っているか等々を、確かめるのもシャリの気が咎めた。

降嫁当日・朝（後書き）

たぶん今頃ゴトルーは王宮で、世にも恐ろしい顔になっています。
顔が弛むのを抑え様と、必死なので。

降嫁当日・昼

ゴトルーは昼になっても、帰って来なかった。

普段一日二食だからと断ったのだが……。

「肉が付けば魔力も増えて、変化時間も増えるのではありません？」

と言われ、いや魔女だからこれ以上体型は変わらないだろうと答えれば……。

「本当にそうなのか、一度お試ししましょう」

とまたもユイナに押し切られる形で、シャリは食堂に引っ張り出されてしまった。

大きな楕円のテーブルで、シャリの横にユイナが座り、向かいにはホルマとその横に先程話にだけ出て来た料理人のサッドが座る。

何だか見張られている様だと、シャリは思った。

これで斜め前の席にゴトルーが座っていたら、重圧が掛って仕方なかっただろう。

見つかったら大変なので、部屋に持ち帰るのだけは拒否したが、そういえばゴトルーも猫の口に入る小さな砂糖菓子を、会うたびシャリに食べさせようとしたのを思い出す。

きっとカジユ家の人間は、何かに食べ物を与えるのが好きに違いない。

砂糖菓子もゴトルーからもらったのが始めてなら、誰かと一緒に食事をするのも始めてで、カジユ家に来てからシャリは奇妙な扱いを受けてばかりだ。

三人に比べると量はかなり少ないが、シャリのこれまでの一日分近くあった。

しかも全く知らない物、もしくはこれまで遠目にしか見た事のない物ばかりで、これは本当に魔女が食べていい物なのだろうか？とシャリは思ってしまう。

彩が良く、食べ物の匂いはするのだが、実は飾りだと言われてもおかしくなかった。

その思考がそのまま表情に出ていた様だ。

「いいですなあ、その疑わしそうな顔。これからますます腕を振りたいくなりますわ。まずは一口、召し上がって下され」

そう言ったのはサッドで、その言葉にユイナが頷く。

「そうですわね。シャリエゼーラ様のは量がとても少ないですもの。すぐ冷めてしまいますわ」

「いただきますしょう。お代りありますからね、自分が作ったのではありませんが」

ホルマが食べ始めて、ユイナとサッドがそれに続く。

そうになると、さすがにシャリも口を付けざるを得なかった。

「……っっ！」

王宮で食べた事のある食材も入っている様だが、全然違う。

ゴトルーにもらった砂糖菓子も甘くて美味しかったが、どうにも甘過ぎて一つ食べればもう充分……という感じだった。

だがサッドのこれは、きつとあの味に違いないとシヤリは思う。

微笑みを浮かべて美味しゅうございますでもいいのだろうか、思わず、つい「うまいっっ！」と声に出してしまう、あの味なのではないだろうか？

それを聞いたたび、どうにもその感覚が理解出来なかったのだが、今なら分かるっ！

ゆっくり、ゆっくり何度も噛む。

その味が薄れていった時には少し悲しくなってしまった。

しかしまだもう一口分あるし、それに他にも違うお皿がある。もしこれ全部が「うまい！」物だったら……。

いやいや一回食べたからといって、その美味しさに口が肥え、それ以外の物は受け付けなくなる、なんていう事はないはずだ。

シヤリはそう思い直して、他にも手を伸ばした。

しかし味わうのはもっと欲しいのだが、料理と気持ちが食道までいっぱいいっぱいに詰まってしまった様で、結局シヤリは用意された物も全部食べられなかった。

部屋に帰ってから、何だかシャリはぼわくとした心地でしばらく座り込んでしまった。

サッドの料理が体に浸透していつている気がする。

そしてその心地が落ち着くと、今度は逆に動きたくて仕方がなくなってきた。

今なら本当にどこまでも飛んで行けそうなの……。

けれどシャリは鳥ではなく、猫に変化した。

そして部屋中を駆け回ってみる、何周も何周も。それからゴロゴロと転がった。

何て事はないのに非常に楽しく感じられるなんて、「うまい！」は偉大だとシャリは思った。

いつでも簡単に人には戻れるし、お詫びの印のつもりでゴトルーが好きな猫の姿のまま玄関で待っていたシャリが、結局夕方になって帰って来たゴトルーから開口一番に言われたのは、

「なぜ猫の姿に？ 魔力を消費するのでは？」
という言葉だった。

それを聞いたユイナから、

「交換条件の開始ですわよ、シャリエゼーラ様。わたくしの方もちゃんとお約束を守りますから、ね？」

しっかり念を押されてしまう。

「こうなると思いましたが、少ないですけれど準備しておきましたの。新しいお召し物も部屋にお持ちしますわ」

「では一緒に行きましょう。私も着替えますから」

そしてまたひよいと抱き上げられて、シャリはゴトルーの腕の中にいた。

王宮の庭で免疫が付いてしまっており、どうせ逃げられないのだからという開き直りもあり、シャリは大人しくゴトルーに運ばれるに任せる。

「愛しいシャリエゼーラ、やっと貴女を名前でお呼び出来ますね。貴女の事は知られているのに、名前が分からず、ずっと腹立たしい思いをしていました。

使者から名前を告げられた時も、誰の事かと。いや、その前に使者自体、訪れる家を間違えたのではないかと……」

それはそうだろう。

普通なら王族の姫が一代限りの貴族に降嫁など有り得ない。

ずっと王宮で生かさせてもらえると思っていたのに、なぜカジュ家へ降嫁する事になったのかが知りたい。

長い名前の前に付いた形容詞は聞き流し、シャリはゴトルーを見上げる。

「上の方々の言葉を鵜呑みにするなら、私には魔女の力が効かないか、封じ込める力があるそうですよ。

だから貴女を簡単に王宮へ連れて帰れたのだ、と。

どうやら方々は貴女が王宮から自ら逃げ出したのではないかと、疑っている様ですね。

私は貴女に始めから囚われているのにな。

とにかくそう思われたのは本当に好都合でした。

王都での仕事に蹴りを付け、貴女をショウプへ攫う計画を立て様としていたのに、国の方が私に貴女をくれたのだから。

シャリエゼーラ、貴女は我が家にいるのです……ずっと。逃げ出すなんて、考えないで下さい」

「……」

ゴトルーの目は怖い。

しかし今の後半の言葉も聞き流すとして、問題は前半のその理由だ。

魔力を封じ込められたという嫌な響きの気分を感じた事はないが、確かにゴトルーの手は眠くなる。

魔力自体は国の見解とは逆に増えているのだが、やはりゴトルーは何か力を持っているのではないかとシャリは再び考えた。

「……ゼーラ。シャリエゼーラ？」

この名前が本当の自分の名前のはずなのだが、どうもしっくり来ない。

それでもシャリはゴトルーに意識を向けた。

「貴女の様子だと、ご覧になってませんね？」

この部屋、外の廊下から見ると扉は二つですが、……ここを開けると寝室で、更に私の部屋にも繋がっています。

夜は一緒に寝ましょう。私達は夫婦ですから」

「!?!?!?!」

「ぜひ元の姿でも驚く顔を見てみたい。貴女の色んな顔を見せて下さい。」

我ながら、こんな言葉を吐ける様になるとは……。

王族の姫をもらったに相応しい振る舞いを心掛けますが、貴女に逃げ出されたら、怒り狂って周囲に当たり散らすかも知れません。

ここに留まって下さい、今はそれだけでいい」

姫ではなく、魔女なのだが、今のはそのまま聞き流すにはどうも物騒な内容だった。

どちらにせよユイナとの約束もある、当面シャリはこの屋敷にいる事が決定した。

そのすぐ後、ユイナとホルマが持ち込んだ衣装が、これまで袖を通した事のない色とりどりの物で。

しかも王宮で見た事のある物よりはかなり少ないが、ところどころにヒラヒラとした物が使われおり、シャリは目を白黒させ……

その後の夕食は汚さないか非常に心配だった。

美味しかったが、夕食は味付けがやや濃く、こってりとしていたせいもあり「うまい！」には至らなかった。

そして量が半端なく多くて、またも食べ切れず、ゴトルーとユイナから怖い目をされた。

つい咄嗟に謝ったのだが、すると今度はホルムとサッドが浮かべていた心配顔をされてしまい。

「シャリエゼーラはもう少し食べた方が良いと思いますが、確かに急に沢山は無理でしたね。焦らず、じっくり時間を掛けます。なにせ時間はずっとあるのだから」

これも聞き流した方がいいに違いない言葉をゴトルーに言われたが、とりあえず砂糖菓子の際の様に、ほぼ無理矢理口へ押し付けられる事にはならずに済んだ。

カジュ家の面々で少し話があるそうで、シャリは先に一人で部屋に送られた。

降嫁当日・昼（後書き）

カジュ家の料理は薄味に変わっていきそうです。
ユイナから、当面シャリの負担となる行為禁止令がゴトルーに出されました。

降嫁当日・夜

もらった火は部屋に付いてすぐ消してしまい、また猫の姿になる。魔女だからだろう、シャリは夜目が利くのだ。

それに猫になれば、服を汚さなくて済む。

後はもう眠るだけのはずだから、問題はないはずだ。

いつもの習慣で今日の空はどうだろうか、シャリは外を見た。当たり前だが、王宮の部屋から見える景色とは違う。

同じなのは空が頭上にある事だ。

昼食を食べた後、物凄く心身が満ちていた。

今日はあとどれくらい変化していただけるだろうか、という気持ちもあった。

たぶん眠っている間に解けてしまうだろうが、一人と一匹なら、一緒に寝るとい言葉も抵抗がない……気がする。

夜空を見つめていたら、もう早くも今日は眠たくなって来た。

本当は人目があって緊張して自覚がなかっただけで、夕食の時間には既に眠かったのかも知れない。

ところが……。

「まあっ。真っ暗ではありませんか……っ」

ユイナが驚いた調子で部屋に入って来て、シャリはハッと睡魔か

ら引き戻された。

カジュ家の面々での話も終わったらしい。

「……それで。なぜ貴女はまた猫の姿なのです、シャリエゼーラ？」

二人で来たという事は、まだ何かあるのだろうかといぶかしんだシャリに、ゴトルーが悪巧みを考え付いた様な表情を向けていた。

シャリが故意に聞き流している言葉の数々よりも、そんな表情の方が似合っていて……何を言い出すのが恐ろしい。

「その姿ならちょうどいい。風呂ですから、一緒に入りましょう」

「……？」

お風呂？

何だろうとシャリが首を傾げる一方、咎める様にユイナが。

「ゴトルー様っ」

「これくらい許せ、ユイナ。獣姦の趣味はない」

「ご、ご……っ」

狼狽し、声を失った。

そんなユイナを置き去りにし、

「さあ、行きましょうか」

素早くシャリを抱き上げて、ゴトルーが歩き出した。

ゴトルーは黒を気安く持ち過ぎだとシャリは思う。

そうして連れて行かれた場所は湯気が籠った小さなタイル張りの小部屋だった。

「少し待っていて下さい」

「……」

ここがお風呂。

その床に一度下されて、ここは何だろうとシャリが戸惑っていると、ゴトルーが入って来た。

灯り一つの薄暗い中だったが、全裸になっているゴトルーをシャリはしっかり見てしまった。

「さて、お湯を掛けますよ」

「……？」

ゴトルーの楽しそうな声と同時に、足先へとお湯が掛った。熱くもない、冷たくもない、温かい。

カジュ家ではお茶も料理も、温かかった。動かずにいたら、体全体にお湯が掛けられる。

「目を閉じて」

そして言われるままにすると、一層そつと頭にも掛けられた。

「まだ開けないで」

始め耳と頭の上、それから額に、眉毛と瞼。

小さくシャカシャカという音と共に、頬や口の周りをゴトルーが触れていく。

「はい。もう一度、顔にお湯。……もうちょっと」

何をされているのだろうとは思ったが、それが嫌な事だとは思わなかった。

「今、拭きます。……大丈夫ですか？ 顔はお終いで、次は体」

優しくお湯を拭き取ってもらい、恐る恐る目を開くと、床に白い泡とお湯とが一緒に流れている。

そして良い花の香りがして、シャリは思い出した。

お風呂という名前は知らなかったし、こんな小部屋ではなかったが、裸の人間とお湯と泡と香りの光景を見た事がある。

細やかな泡で足や背中にお腹、……え？ え？？ と抵抗する間もなく、あっちゃこっちゃも洗われてしまった。

そしてお湯。

「……」

……何もなかった事にしよう。

シャリは体を震わせて、お湯を飛ばした。それを見て、ゴトルーが笑いながら言う。

「もう少しだけ待って下さい。」

他家ではどうか知らないが、我が家ではまずこうして体を洗ってから、湯船に入るのです。

王都も水は豊かですが、残念ながらターブと違って温泉がない。一人一人お湯を沸かして、溜め直すのも面倒なので」

温泉？

また知らない言葉が出て来た。

湯船はシャリの目には小さな低い壁に見える。

それにしてもこんな小部屋に、裸の男と魔女という構図はマズイのではなからうか？

だからユイナはあんな調子だったのかと、今更思った。

やはり自分の事は一人ではなく、一匹に換算しておこう。

「さて、お待たせしました。入りましょう。溺れないで下さいね……？」

掬い上げられたシャリはゴトルーの胸にしっかりと抱かれて、小さな低い壁の中へ一緒に入った。

中にもお湯が入っており、温かった。気持ち良くて、思わず吐息が漏れる。

温かくて、それからその中でゴトルーに撫でられて、そういうば

お風呂の前から眠かったんだと思い出した。

いつしかシャリは大きな肩口に頭を預け、
瞼を落としていた。

降嫁当日・夜（後書き）

前話で「留まってくれるだけでいい」と言っていたゴトルーですが、早くも前言撤回です。

一夜明けて

いけない、時間！

と思つて、目を開いたシャリはいつもと違う天井にまず戸惑い、そして納得した。

手を持ち上げて見ると、毛がなくて元の姿だと分かる。

毎朝シャリは完全に魔と化さない為の儀式として、聖水に身を浸している。

今日からは、いいのだろうか？

それともカジュ家へも誰かが迎えに来るのだろうか、それも毎朝……と心配になった。

とりあえず起きていた方がいいに違いない。

上体を起こして、シャリは自分が服を着せられている事に気付いた。

しかも昨日の夕食に着ていた物とは、また違う物だ。

一体何種何着シャリに用意してくれたのだろうと、不安になる。きつと寝皺が出来ているに違いない。

「どうしました、シャリエゼーラ。まだ日の出前ですよ？」

静かに動いたつもりだったが、起こしてしまったらしい。
宣言通り本当に、一緒に寝ていたゴトルーから声を掛けられた。

「ごめん、なさい」

「構いませんが、どうしました？」

再び尋ねられて、シャリは質問で返す。

「あの……私の、聖水の儀式、は。どうなるのでしょうか？」

「貴女はもう聖水漬けや聖言攻めにされなくていいのです。私が貴女の魔を封じている事になっていますから」

どうやら降嫁の理由と同じで、儀式も必要なくなったらしい。

だが毎朝の事だったので、急になくなるのは、どうも不安だ。

「もう少し横になって、お話でもしませんか、シャリエゼーラ？」
見下ろしてばかりでは不敬になるかと、シャリはゴトルーの言葉通りにした。

すると抱き寄せられる。

「これで良し」

「……」

「そもそも私は貴女に、そんな儀式など必要ないと思っています。
毎朝聖水漬けにされる事で、体を清潔に出来たという点だけは認めますが、冬の時期はかなり冷たかったですよ」

「いえ。私は魔女ですから。何事も、……慣れです」

「貴女を魔女と呼ぶならば、貴女に様々な事を強いて来た者達は皆悪魔になりますね。その点、何人もの人間を切って来た私も悪魔ですが……」

「……貴方が、切った？」

「辺境の小競り合いというのはまあ、殺し合いの様なものでしたから。私から見れば多くの血を浴びている私などより、シャリエゼーラの方がよほど清らかな存在だ」

ゴトルーに髪の毛を撫でられた。

そういえば元の姿でこうされるのは、始めてだった。

この状態で、何を今更なのだが。

やはりゴトルーに触れられるのは心地好い。

「もし貴方が、私と同じ……魔の、属性なら。それは、とても嬉しい事です」

「……。……貴女がそう思ってくれるなら。私は自分の過去を肯定しようと思います、シャリエゼーラ」

険しかったゴトルーの声が優しくなって、シャリはほっとした。

しかしまたぞろ自分の事が心配になってしまう。

「起きます。やはり朝日ぐらいは、浴びたい……ので」

「では私もお付き合いしますよ。聖水というわけにはいかないが、

水も一杯持って来ましょう。……なんて、単に喉が渴いているだけですが」

喉の渴きが本当なのか、それとも氣を遣ってくれた言葉なのか……たぶん後者なのだろうなとシヤリは思った。

一夜明けて（後書き）

幸せだなく。

塀の外

本名なのだろうが、長い名前で呼ばれる事にシャリは違和感があった。

同じ様にいくらシャリエゼーラ物だから、汚したって、どんな使い方をしたって、いいのだと言われても。

自分の為に用意された物のはずなのに、シャリは勿体無いと思ってしまう。

もし魔の色を持つ事無く生まれたシャリエゼーラ姫だったなら、きつと何でも当然の様に優雅に着こなし、使いこなしたのだろうが、魔女のシャリが同じ事をしたら罰が当たる。

どうしてもシャリではなく、シャリエゼーラ姫に用意された物の数々、という気がしてしまっていた。

屋敷の中でうろうろしたり、庭を見て回ったり……食事の時以外は猫の姿で過ごした数日。

王宮にいる時と比べて、服を汚さないかが心配な以外は何とも緊張感なく、のんびりとして……シャリは暇だった。

何しろカジュ家では、儀式に掛かる時間がなく、これからも生かされていく為に情報を集める必要もないのだ。

忙しそうにしているユイナ・ホルマ・サッドに手伝いを申し込んでみても。

「これ以上、手を荒すなんてとんでもない」

「細くていらっしゃるんで、何だか頼むのが……」

「儂の仕事ですからな」

そんな風に、とにかく断られてしまう。

王宮は当然の様に広くて昨日はあそこ、今日はここ、明日はそこいらと、気分次第で散歩の場所を変える事もしていたが、カジュ家ではそれも出来ない。

「シヤリエゼーラ様、服は汚して当たり前ですよ。洗濯屋もきつと喜びますわ」

「……洗濯屋」

「ええ。洗ったり仕上げたりするのに大変な物は、外に頼んでいるのです」

外に……ああ、そうか。

とシヤリは思った。

今まで王宮でも、この屋敷でも、あくまで堀の内側だけだった。

この屋敷へ来た日、どこまでも飛んで行こうと思った様に、いつか本当にここから去る事になったなら、堀どころか王都も国からだって後にするというのに。

塀を越えた外を見に行ってみよう。

さあ、そうと決まればとにかく出発だ。

シヤリは空へと飛び立った。

とりあえず黒なのか、それとも色の濃い鳥なのか、判別が付き難いと思われる高さまで一気に上昇する。

たまに地面を歩いている分にはそれほどでもないのに、王宮の塔の先端に掲げられた旗が物凄い勢いではためている事があった。だから天に近いほど、風の強い事があるらしいとシヤリも知っていたが、今は問題なく飛んでいる。

危うく忘れるところだったが、行ったきり迷子にならない様に、空からのカジユ家の位置関係を把握した。

空から見たカジユ家の屋敷は王宮の近くにある屋敷に比べれば、かなり小ぢんまりとしている。

爵位の差というやつだろうというのは、シヤリにも分かった。

王宮でも与えられる部屋に、差があるのと同様だ。

カジユ家よりも更に王宮から遠くなると、道々に大勢の人が溢れていた。

荷物を持ったり、もしくは台車に乗せて運んでいる姿も多い。

王宮と同じ様な違う様なざわめきと、それから時々大声を張り上げていている人もいて、一体どんな話を話したり、言ったりしているのか、間近で聞いてみたくなった。

カジュ家よりも更に小さく、同じ様な造りの建物の屋根が並んでいる場所から奥まった……と表現するのだろう、その屋根も壊れて人通りの少ない場所を発見する。

道さえ覚えられれば、この辺りから猫の姿で地面に降り立てないだろうか？

そう思ったが、我慢した。

今日は初飛行でもあるし、隠れて見ているつもりが誰かに気付かれたら、使い魔が現れたと街中大騒ぎになってしまうかも知れない。とりあえず、大まかな様子見に努めよう。

しばらくゆったりと旋回し、ふとシャリは上空からゴトルーを見つけたい気分になった。

それはこの辺りを飛び続けて、いつそ降りてしまいたいという誘惑と戦っているよりは良策に思えた。

シャリは一路、王宮を目指す。

もしゴトルーが外に出ているとしたら、降嫁する前に会っていた場所の近くにある、騎士団の鍛錬場だろう。

さて、いるだろうか……と思う間もなく、眼下から鋭い指笛が聞こえて来た。

「……？」

気のせい、だろうか？

自分へと向けられたものに、シャリは思えた。

しかも今や訓練中の見習い騎士達が、何事だという様に上を見て来る。

まだ色は見えていない様で、ただ単に興味本位という調子だというのに……。

続けて二度の指笛の主であるゴトルーは明らかにシャリと分かった上で、降りて来いと身振りで地面を指差していた。

本当に降りていいのか躊躇うが、ゴトルーに気付かれただけならまだしも、周囲も騒いでいるのだ。

シャリは心を決める。

こんな時は一気に行くべきだ。

突っ込み降りて、猫へと姿を変え……着地する。

間近で見たゴトルーは非常に怒っていた。

周囲の反応が黒・魔女・使い魔等の眩きと共に嫌悪へと変化した
が、それよりもゴトルーの表情の方が怖い。

「私を見張りたいなら、空からではなくここでどうぞ。それとも、
どこか別の場所へ行くところだったのですか？」

ゴトルーの声は非常に低いのだが、今はそれに輪を掛けている。

怒鳴られているわけでもないのに、何やらシャリは身を縮こまら
せた。

「答えは帰ってから、じっくりお聞かせ頂くとしよう」
漂う不穏な空気を感じるのは、シャリだけではないらしい。

「なぜ手を休めている」

その言葉で見習い騎士達は一気に鍛錬へと戻ったのだが、シャ
リに向けられていた嫌なさざめきが、今や恐々とゴトルーを窺って
いる具合だ。

普段の様子は知らないが、その後の鍛錬は必要以上に力が入って
しまっていると、邪魔にならない様に鍛錬場の隅にいたシャリから
は見受けられた。

ゴトルーはそれに対して、何も口を挟まなかった。

自らも鍛錬しつつ、行う行動の指示を出しはするが、細かく指導
に当たる事はなかった。

夕方まで騎士団の鍛錬場にて、一緒に帰る事になるとシャリは思っていたのだが。

「家を出る事をユイナにも誰にも言っていないですね……？ 急にいなくなった貴女を家の者が心配しているはずですから、先に屋敷へ帰って下さい」

鍛錬場の周囲を走れという指示を出したゴトルーに、最後の部分を強調して言われた。

シャリは内心、また屋敷内をうろうろしていると思われるはずだと思ったが、ここで嫌がる理由もなく、今ゴトルーに逆らうのは得策ではない気がした。

そこでまた鳥の姿となり、空を通ってカジュ家へと戻る。

その時は午後のおやつの時間だからと、ユイナがシャリを探しているところだった。

いつも夕食がますます食べられないからと断るか、こそこそと隠れているので、今日もシャリはその呼び声からは逃げる事にした。

塀の外（後書き）

ショックを受けてます。

解錠

夕方になり、帰って来るゴトルーをシャリは冷や冷やそわそわと、元の姿で出迎える事にした。

その様子をユイナとホルマも見えていて、あれこれ聞いてくれるもので、結局シャリは問われるまま屋敷から出た事を答えてしまい、二人にも今日の空からの探検を知られる結果となっていた。

ほっとしたのは、ゴトルーの様に激怒されなかった事だ。

「今、お話し下さったのと同じものを、ゴトルー様にもなさいませ。きっとお怒りは解けます」

「たぶん旦那様は見張られていたと思ったから怒ったのではなく、シャリエゼーラ様が黙ってどこかへ行くつもりだと、誤解されたのではないですかね」

「もう一度お尋ねしますが、勝手に出て行かれようとしたわけではありませんのよね？」

ユイナの言葉にシャリは頷く。

「まだ。約束は、続いていますし……。たぶん？」

「ええ、続きますとも」

そんな話をしている間に、ゴトルーが帰って来たので、シャリはユイナとホルマに話した事をもう一度繰り返す。

二人に伝えられた様に、ゴトルーにも分かってもらえただろうか……もう怒っていないかな？

と、シャリはチラッと見上げる。

「……。……分かりました」

ゴトルーがふくつとため息を吐く。

「私の勘違いでした。」

しかしですね、絶対に一人でどこかに降りたりはしないで下さいよ。

いくら貴女でも眠らされたり、気絶させられたりしたら、再び逃げる事も出来ないでしょう。

私みたいな不埒者が……云々」

どうやらもう大丈夫らしい。

ゴトルーの言葉はまだ続いていたが、シャリはいつしかそれを聞き流し、自分の考えに没頭していた。

結局、今日も王都の壁の内だった。

でももし飛んで行けたら、世界のどこかには黒でもずっといい場所があるのだろうか？

カジュ家の面々が奇妙だから、もしかしたらそんな場所があるのではないかと夢見てしまうのだ。

自分はその場所が見つかるまで、果たして飛び続けられるのだろうか？

死なない限りは、一人でも生きていくのだけでも……。

シャリの心はいつしか飛んでいた。

昼間、飛んだ空へ……そして王都の外へと目を向ける。

「……か？ ……、……シャリっ？」

「ッ！」

呼ばれた名前に、シャリは引き戻された。

「大丈夫ですか、シャリエゼーラ？ 目の焦点が合っていなかった。
お疲れなのでは？」

シャリは首を横に振る。

「名前。その名前、違います。さっき、呼んで……くれていたのに。
私の名前」

「……………シャリ？」

かなり困惑気味に呼ばれた名前だった。

それでも。

「大好き！ ゴトルー、大好きッ！」

シャリは嬉しくて、ゴトルーに飛び付いた。

姫ではなく、魔女として生まれた自分の名前だ、それこそ。

これが相手に最大級の感謝を表す言動のはずだ……と考えが出て
来たのは、既に行動を行った後の事で。

口と体が自然に動いていた。

だが抱き締め返してはもらえず、不安になり体を離して見上げると、ゴトルーが不自然に強張っている気がする。

「……ごめん、なさい」

もし猫の姿だったなら、ゴトルーはちゃんと受け止めてくれただろうか？

今からでもそうしてみようかとシャリが思った途端、制止の声が掛けられる。

「シャリっ。そのままの姿で……申し訳ない、愛しいシャリ。貴女からそんな風に言ってもらえるとは思ってもみなくて、驚いてしまった」

「魔女のシャリでも、……愛しい？」

「ええ。貴女にしかこの言葉は使いませんよ、シャリ」

シャリはゴトルーの目をじっと見つめた。

月明かりの青。

こんな風にじっと見るのは、きっと始めて会った王宮の庭以来だ。

怒ってもいない、先程までの感じとも違う、一見するだけでは相変わらず怖い……でも優しい。

それから、もう一度して欲しそうな感じが伝わって来て、シャリ

はゴトルーに再びぎゅっとしがみ付いた。

解錠（後書き）

ゴトルーはこれからも一層、シャリ独占を目論んでいきます。

満月

真夜中、誰かに呼ばれた気がして、シャリはぼつかりと意識を浮上させた。

今度こそゴトルーの目を覚まさない様に、そうっとそうっと注意を払いつつ、シャリは上体を起こすだけでなく、寝台からも下りる。

シャリを呼んだのは月だったのだろうか？

空を見上げると、まるで待ってくれていたかの様に輝いていた。

そういえばカジユ家に来てからというもの、ゴトルーの手で朝まで眠ってしまうので、こうして月に照らされる時間がかなり減っている……にも関わらず、長時間の変化が出来ていた。

ユイナに試してみましようと言われた時、あまり意味がないだろうと思っていた食事の量を増やす事。

それから、もしかするとシャリは王宮では深く眠れていなかったのかも知れない。

外見的には変わっていないが、これまで無意識に身体の生命維持へ回していた魔力を使わずに済んでいる。

考えるとそんな気がした。

つまり魔力の容量が増えたとしても、食事と睡眠が元に戻れば、変化時間も前とそう変わらなくなるに違いない。

それでもシャリは生きていくのだが……。

魔力を充足させ、シャリは眠るゴトルーの横へ戻った。

せっかくこうして目が覚めたのだから、前に猫の姿では分からなかった事を試したくなったのだ。

王宮の庭でした時は、ゴトルーに剣呑な顔をされたので、もしそうする事で起こしてしまったら同じ表情を浮かべられてしまうだろうが、せっかくの機会だ。

シャリはゴトルーの手に触れた。

規則的に行われている寝息だけに注意しつつ、全ての指の縁をなぞってみる。

シャリのものとは違う、太く硬い節。

皮も爪も、シャリのようにカサカサとしてはいないが、柔らかいという言葉とは正反対に出来ている。

舐めたら起きてしまうだろうかとも思ったが、結局実際の行動に移した。

まずはゴトルーの指先をペロペロと。

目が覚めないと分かり、次いで指の付け根まで辿り、それから猫の姿の時にもした様に、ゆっくりと口に含んでみる。

王宮の庭でもらった小さな砂糖菓子を舐めるみたいに、舌で味わ

おうとした。

……が、結局分らず仕舞いだった。

月の光を浴びて、今の時点ではこれ以上の魔力を有せない状態でこうしたのに、やっぱり何も感じられない。

それとも見方の方法が間違っているのか……。

シャリはゴトルーの指を舐めるのを止めて、眠る顔を見つめる。

この口でゴトルーはシャリと呼ぶ。

残念ながらカジユ家の面々の中でも、そう呼んでくれるのはゴトルーだけだ。

「その様な悲しそうなお顔をなされても、わたくしには……」

「旦那様が恐ろしいもので……」

「お仕えしている身ですから……」

こんな具合に首を横に振られ、短く呼んでくれる様にはなったのだが、様付けを止めてもらうのは無理らしい。

黒を気にしないカジユ家の面々がこうなのだから、きっとこの先もゴトルーしか名を呼んでくれる人はいないかも知れない。

ここを出る事になったら、その一人もいなくなる。

今はまだ大丈夫だ。

けれど後十年、そして二十年経っても、まだ一人だったら……。

考えても仕方のない寂しさに捕まりそうになって、シャリはゴトルーの唇に指の腹で触れてみた。

始めて呼ばれた時、ただ嬉しかった。
心に灯が燈される気持ちは残っている。

それからその後、ゴトルーの手と同じで眠たくなる効能があるのも知って。

更にたぶんゴトルーが怒っている時に呼ばれたら、今まで以上に怖いと感じる日も来るだろうとシャリは思う。

指へそうした様に舐めてみようか、と考えて顔を近付け……止めた。

きっとどこを舐めても、ゴトルーから魔力は感じられない。

灯が燈って、眠たくなって、例えゴトルー自身が自己申告通りに魔の属性でも。

どんなに期待しても、ゴトルーは人間でシャリと同じモノではない。

シャリはゴトルーの唇から指を離した。

身にある魔力は充分だが、心から寂しさは抜けてくれない。

こんな夜は寝るに限る！

とシャリが横になろうとした時、名を呼ばれた。

「シャリ。遠慮せずに、唇も舐めて構いませんよ」
「ッッ！」

唇も、という事は指を舐めていたのにも気付いていたのだろうか。
寝息はずっと変わらなかったというのに。

「ゴトルー、今度は……怒らない？ また起こして、しまつて。ごめんなさい」

「今度は？ ああ……王宮での庭の事ですね？ あの時はお人の気も知らずに、こんな事をする貴女を少々恨めしく思いましたが、こうして一緒にいられる今は怒りませんし、いくらでも好きなだけどうぞ」

シャリからの謝罪はアツサリ流され、これで晴れてゴトルーの許可も下りたわけだが……。

「もう、舐めない。ゴトルーに、魔力がないか……見たかっただけ」
「ない、でしょう。……もし、あったなら舐め取ろうとするのですか？」

その言葉にシャリの方が驚いて、首を横に振った。

「そういうものではないのか。それは良かった」
「良かった……？」

「私以外は舐めて欲しくないもので。今まで私以外に誰か……？」
「黒を、近付けようとしたのは。ゴトルーしかいない」

シャリは触れたり、舐めたりしてみた理由を説明した。

「なるほど。シャリ……私に魔力はありませんが、力を持っているとするならば、貴女への愛ですね。愛の力は何物にも勝るそうですから?」

いつもなら聞き流している言葉なのだが、始めに名前を呼ばれたせいで、どうにも注意を引き寄せられてしまい、シャリはしっかりと聞いてしまった。

ゴトルーの外見に全くそぐわないその言葉は、やはり魔女に対するものとしては非常に勿体無く。

けれど確かに自分へと向けられた言葉に違いなくて、勿体無いという以外の気持ちが体中にぼわっと広がったのを感じた。

本当? それとも嘘? 疑わしい、信じてる。嬉しい? 照れ? 感謝? 恥ずかしい? 的確な言葉に変換出来なかったその感情は、そのまま体をなぜか熱くさせた。

「シャリ」

「……っ?」

そんな時にそれを悪化させるかの様な声音で名を呼ばれ、シャリはうろたえる。

「舐めて下さい。貴女になら、愛を感じ取れるかも知れませんよ?」

ほら、シャリ。私の上に跨って……、そうそう」

月に呼ばれた気がして目が覚めて、その月光の青の瞳に唆されるままに、シャリはゴトルーの唇を舐めてみた。

上唇を舐め、下唇も舐め、自分の唇を使って食んでみるが、やっぱり分からない。

でも分かる事を期待してはいなかったし、始めから唆されただけで、分かる事が目的でもなかった。

だから寂しさは感じない。

ゴトルーの顔を見下ろしているうちに、魔力とか愛の力なんてものを探るのは全く関係なく、シャリは触ってみたくなっていた。

ぺたぺたなでなで……。

ゴトルーの髪と額、頬、耳、顔の輪郭。

眉毛に、瞼、鼻。

そしてまた唇に戻る。

シャリは王宮で何度か見た事のある、光景を思い出していた。

「ゴトルー、好き。大好き」

本当は人間同士がするものなのだろうが、シャリはゴトルーの唇に自分のものを重ねた。

もしかしたら本当にずっとここにいてもいいかもと、期待するのは止めておいた方が無難だけれど。

ここにいたいなとこっさり思うくらいなら、許されるかなと思う。

たぶん力を探る為の行為じゃないと気付いたのだろう、ゴトルーの表情が変わっていた。

でも、この強張った顔は驚いた時のゴトルーの表情。

だから大丈夫だと、もう一度口付けた。

満月（後書き）

ゴトルーの独占欲は臆面なしです。

夢

シャリがいなくなった王宮では本当に些細な変化が起きていた。

王宮で生きていく以上、シャリは自分の身の上がどうなるかといった話がないかを、ただ聞くだけではなく、いつしか我が身に向けられる王宮での不満のとばっちりが少しでも減る様に気を付けていた。

例えば苛立ちや塞いだ気分を抱えた者がいたり、仲の悪い者同士を会わせない様にする為に、鳥の姿で美しく囀ったり、嘴で啜えられる小さな花を一つ落したりして。

心を静め、慰め、そして気を引いて足止めをしたりし。

実際の気候ではなく、空を見上げては季節を先取りし、細々と備品に気を配って……出入りの商人のものは無理なので、王宮の買い物リストにちよこつと数字なんかを書き加えたり。

そんな具合に。

それらは絶対に必要な事や物ではないし、シャリだって常時気遣えるわけがないので、本当に些細な事だった。

ほんの少し、王宮の空気が悪くなった様な、働き辛くなった様な。

それが王宮から魔女がいなくなって、清々した頃からではなかっただろうか、王宮で働く者の誰もが口には出さないけれど内心思う様になるのは、もうそろそろ……。

この数日間、シャリは食事以外を部屋に籠って過している。

シャリにちゃんと文字が読めると分かると、ユイナが約束通り地図とそれから観光案内書を数冊持って来てくれたのだ。

地図はこうして手に取って見ても、大まかな方向しか分からない代物だったが、この観光案内書は面白かった。

ゴトルーの話でシャリが興味を持っているのは、温泉だ。

温かいお風呂というのが思いの外、気持ちのいいものだと思ってしまった以上、何もせずにお湯が手に入るというのは非常に魅力的だった。

街一帯が温泉街という非常に賑やかな所もあるらしいけれど、そんな場所にシャリが行けるはずもない。

シャリの目を引いたのは秘湯と呼ばれる温泉で、中には河原の岩の間から湧く湯もあるのだそう。

湯ばかりでなく、すぐ側に水も流れているなんて一挙両得。

そのうちの一つはターブ地方にあるのだが、別に温泉はそこだけではない。

しかも冬が厳しいらしく、その時期の食べ物を考えるとターブに拘るのは得策ではない様だ。

拠点を何カ所も持ったっていいだろう。

季節で移り住んでもいいし、湯の効能とやらで選んだっていい。

持って来てもらった数冊を何度も見比べて、シャリはほくほくだった。

頭の中で世界が広がって、散歩へ行く気にもなれない。

それにカジュ家から出て行く時にこの本は持って行けないのだから、しっかり覚えなくてはならない。

温泉だけではなく、湖や河川の場所も頭の中へ組み込んでおかなくては……。

しかしそんなシャリの熱心ぶりは、カジュ家の面々に心配を掛けてしまったらしい。

「シャリ。そのままの姿というわけにはいかないが、今日王宮へ一緒に行きませんか？」

正直あまり気乗りしなかった。

王宮へ行くくらいなら、外へ出掛けるくらいなら、その分色々覚えたい。

だが体も動かさず、本の内容を頭に詰め込もうとし過ぎて、確かに食欲が落ちているという自覚はあった。

「ゴトルーとは行かない。近くを散歩する」
カジュ家に来てから、シャリは大分スムーズに声を出せる様にな
っていた。

「今の貴女を一人で外へ出したら、もう少しだけとそのまま遠くへ
行ってしまいそうだ。もしくは遠くを夢見ているところを、襲わ
れてしまうか」

「……」

前半部分はユイナとの約束もあるからしないが、後半部分も絶対
に有り得ないとは否定出来なかった。

外へ出る時はいつも変化しているので、元の姿ではない方がシャ
リとしては嬉しいが、でもこの前の鍛錬場での反応を思い出すに、
果たしてゴトルーと一緒に行ってしまっているのだろうか。

「ゴトルー、困らない？」

「この前、見習い騎士達に私は見張られていると言ってしまいまし
たから」

「じゃあ後ろから付いて行って、隅でこっそり見てる。ゴトルーの
お勤めの邪魔はしない」

「私としては早く貴女を連れて、古巣へ帰りたいのだが……」

苦笑いしながら自然に漏れた言葉で、ゴトルーが本当に始めから
そうしてくれるつもりだったのだと改めて知る。

シャリはゴトルーにしがみ付き、上を見上げて聞いた。

「……温泉、一緒に入れる？」
「もちろん」

この数日、一人で行く事ばかりを考えていたので、ゴトルーも一緒にという想像はますますワクワク感が増す。

「一緒に行きたいから、やっぱり離れて見てる。ゴトルーは魔女の力を封じてて、使い魔はそんなゴトルーを見張ってる。仲良く側にいたら不可解」

ゴトルーはヤレヤレと肩を竦めた。
けれど、目は笑っていない。

「シヤリ。初めてお会い出来た日に、貴女を王宮へ戻してしまった時の様ですね。……今のうちに、もっと触っておきましょうか？」

あの月夜から、ゴトルーはこうしてシヤリが元の姿の時にも触る。キスという言葉も教えてもらった。

「今、朝なのに……。これから、一緒に王宮……んっ」

自分からした時、ゴトルーはそんな風にはならなかったのに。

ゴトルーと唇を重ねて、舌を差し入れられ絡められると、なぜか体がふにゃりと崩れてしまうのだ。

自然その状態になると、心が定まらないせいか変化もし辛くなる。

「私達は新婚なわけですから、これくらい。でもまあ、続きは夜で……」

最後にぎゅっと強く抱き締められて、ゴトルーの体がシヤリから離れた。

馬で家を出たゴトルーにシャリは王宮まで鳥の姿で付いて行き、前回と同じく猫の姿で鍛錬場の隅に降り立った。

この前来た時もあったが、やはりカジユ家の面々の黒に対する許容は特殊だと、シャリは思わずにはいられない。

王宮にいた頃はシャリがこそそしていたから、それを遠くから聞いていたものだが……黒だ魔女だ使い魔だというのが普通の反応だろう。

とはいえ、こうしてシャリが目の前にいると、面と向かっては言ってくる来ないが。

大人しく鍛錬の様子を見ていたのだが、ふいにこれまで身体維持に魔力を使っていたという事は、逆に体力を付ければ、その分の魔力を使わずに済むのではないかと思いついた。

という事はユイナが日々口を酸っぱくして言って来る、食事で肉が付けば魔力が増すというのも、あながちハズレていないのだろう。

本当に肉が付くかはまだお試し段階だが、鍛錬と一緒にやっつけば、体の持久力や筋力なら、魔女でももしかしたら付くかも知れない。

ゴトルーみたいに大きく太く硬い自分……いいなあ、うん。

そうすれば例え魔力が尽きても、身一つで進んでいける。

じつとゴトルーの方を見つめていたら、それに気が付いた本人にそのつもりは全くないだろうが、ギロリと睨み返された。

ゴトルーが王都にいる限り、鍛錬場にはよく来る事になるだろうし、そのたびにただ見ているだけなのも暇だ。

とりあえず準備体操をした後、今行われているその場駆け足を始めてみる。

しばらくして自分の息が見習い騎士達とは違って、少しも乱れていない事にシヤリは気付いた。

自分に見習い騎士達よりも体力があるはずない。

ということは、やはり無意識で身体活動の為に魔力を回しているのだろう。

魔力を使わずに体力を付けるには、どうしたらいいのか？

当たり前だが、自分の意思で体を動かしている感覚はあるから、魔力だけで動作が成り立っているわけではないだろう。

つまり本来なら辛くなっている部分を魔力で補って、一見体の状態は変わらずに済んでいるだけ……という事だろうか。

動かさないよりは動かした方がいい、と信じよう。

これも食事と同じ、試みの一つだ。

そうシャリは決めた。

何事もやり過ぎはよくない。

同じ変化の最中でも、ただの散歩とは違って、魔力を消費している感じもある。

元から一日中いるつもりがなかったシャリは昼前に屋敷へと帰った。

そして午後からは部屋に籠る。

たまに様子見でユイナがやって来る以外、午前中に比べると静かだった。

夢（後書き）

約束通りというよりは、また空から王都見学なんて事にならない様、シヤリの暇を潰す為の観光案内書だったのですが。
予想以上の、のめり込みに焦ってます。

見習い騎士

午前中だけ、鍛錬場に通う事が日課となりつつあったある日。

もはやここでも魔女の使い魔は見えて見ぬ振りが、暗黙の了解と化したのだろうと思っていたにも関わらず、シヤリは一人の見習い騎士と対峙していた。

場面は一对一の対戦訓練で、いきなりその見習い騎士が真っ直ぐシヤリの方へ向かって来たかと思えば、相手役を申し込まれたのだ。お願いします、という言葉を使っただけだが、隙あらば……的な気配がする。

ゴトルーが好意を寄せてくれた初めての人間ならば、この見習い騎士はあからさまに敵意を示して来た初めての人間で、これも非常に珍しい。

いつかに喧嘩を売って来た本物の猫の様な人間がいない事をホッと思っていれば良く、詰まらなさと感じる必要なんてないと考えていたのに……。

「使い魔殿はこちらへ続けて来られる様になってから、毎回鍛錬に参加されている。この手合わせも鍛錬の一つと、魔女殿のご不興も買う事はないと思うが、いかが？」

「はい。」

人間なんかに興味はないねとばかり、フイツとそっぽを向く事も出来た。

のだがシャリはそうせず、むしろ受けて立つ様に、見習い騎士の正面に位置取り、キツと顔を上げた。

ゴトルーの顔はあえて見ない様にして、見習い騎士を見据える。すると見習い騎士が鍛練用に量産された剣を構えた。

周囲は関わるのが恐ろしいらしく、聞き耳を立てチラチラと窺いつつも、近付いては来ない。

特に合図はなく、しいて言うなら……行くぞっ的な気配がして、シャリは一撃目を避けた。

見習い騎士の手足と剣の分、シャリの方が相手までの距離は遠い。そして繰り出される剣は喧嘩を吹っ掛けて来た程だから、早かった。

だが本物の猫達に連携して襲われた事もあるから、避けられない事もない。

そうだ、これも本物の猫達とやらかした喧嘩と、意味としてはそう変わらないだろう。

シャリはいつだって悪い事をした覚えはないのだが、気に入らないから追い出そうと、潰そうとして来る。

本物の猫達とのあれこれを思い出し、その瞬間、目の前の相手に対する集中力が散っていた。

しかも振り下ろしてから切り返しが予想外な速さだった為、それがシャリに当たった。

例え切れない剣だったとしても、当たる＝痛い。

気持ちの上では確かにシャリもそう思い、今までよりも間合いを取った。

そして思考を目の前だけに戻す。

シャリの方が相手までの距離は長いが、猫の姿での瞬発力と素早さだけは負けないはずで、それに何といっても的が大きい。

真っ直ぐ詰め寄って、ひらりと交わしついでに、着地を踏み込んで見習い騎士に猫パンチを咬ました。

今やられたばかりの切り返しを真似て、そこそこ上手く出来たつもりだったから、もし元の姿だったら得意げに笑っていたかも知れない。

だが見習い騎士はというと、ますます憎悪を滾らせるどころか、猫パンチなど痛くも痒くもないという風の意外そうな顔しかしておらず。

結局シャリの方が自分の力不足を悔しく思う事になった。

「……そこまですておけ、ビス」

そこへ、ゴトルーがついに割り込んで来る。
ビスというのが、この見習い騎士の名前らしい。

指導はろくにしないのに、一人一人の名前を覚えているのかとシヤリは思う。

いやもしかしたらシヤリがいなければ、きちんとお勤めを果たしていたかも知れなかった。

シヤリが時々欲しいと思う、師。

ゴトルーはシヤリがいなければ、見習い騎士達の素晴らしい師になれただろうに。

必要だから付けられた師なのに、その師であるゴトルーは何も教えようとはしないのだ。

それもシヤリのせいで……。

今度こそシヤリはプイツと顔を背け、一番始めの定位置である隅の方へ行く。

そしてシヤリは先程当たった個所を舐めてみた。

沁みない、痛くもない。

だが魔力が集まっているのは分かった。

毛の下はどうなっているのだろう。

前足で探してみるが、残念な事にどうなっているのかは分からない。

かった。

けれど、それがおかしい事なのはさすがに理解出来る。

もしかしたら本物の猫達と喧嘩した時も、こうして自動的に切り傷や打撲にならない様になっていたのだろうか。

やはり自分は人間とは違うモノなのだ、例えばカジュ家でそれっぽく暮らしていても……。

「使い魔ちゃん、大丈夫？　痛むの？」

何だか非常に聞き慣れない言葉を耳にして考え事から引き離され、シャリは突然真正面にしゃがみ込んだ相手を見た。

ゴトルーが見ている見習い騎士達の中で、唯一の女性である。

何だろうか、今日は二人も人間が寄って来た。

今度は表立って喧嘩を売られているわけじゃない様だが、心理戦とかいうものか……？

シャリは少々身構えた。

でも、……ちゃん。
ちゃん??

「ほくら、お姉さんは怖くありませんよ？　傷の具合を見たいだけですからね？」

優しく言われた言葉に、シャリは激しく身の危険を感じ始める。

「使い魔ちゃん。ずっと思ってたけど、可愛いでちゅねえ。こんなに可愛いのに、傷付ける野蛮人は嫌でしゅねえ。アタシはそんな事、しましえんからねえ？」

ほくらほら、触らせてく大丈夫でちゅよ。……抱っこさせて！
「使い魔ちゃんっ」

避けても避けても、手が伸ばされて来る。

ゴトルーだって、始めはこんなじゃなかったのにつ。

何やらかえって逆に恐怖を感じ、シヤリは引き攣った叫び声を上げた。

猫だから、マズイのかっ？

じゃ、じゃあ大きなモノ、本当に実在するモノでもなくて……シヤリは変化する。

これでもう可愛いとか、抱っことか、そんな言葉は使えまいと踏ん反り返って女性見習い騎士を見下ろす。

さすがにそれは見て見ぬ振りが出来なかったのだろう、鍛錬場の何人かが剣をぼろっと落としたり、体を硬直させている。

なのに……。

「なんてっ、なんて可愛らしい反応なのっ！ どの姿が使い魔ちゃんの本当の姿？ やだもう、可愛らし過ぎるっ。我慢出来ないっッ」

「ぎゃ~~~~~~~~ッ!?!?!?」

あ、足ッ！ 足に取り憑かれてるッ？

シヤリは一気に可能な限り小さな小鳥の姿となり、一目散で空へと逃げた。

さすがに小鳥となったシヤリを咄嗟には捕まえられず、その女性見習い騎士も空へは追って来れなかった。

見習い騎士（後書き）

ゴトルーの独占欲なんか気付きもせず、シャリに寄って来た二人。シャリが帰った後の鍛錬場は、までも戦々恐々だったとか。

会話

カジュ家の屋敷へ逃げ込んだシャリはぐったりと疲れていた。
今日は人間から喧嘩を売られ、可愛いと連呼され……しかも続け
てだったのだ。

とりあえずその原因である当人らの事は頭の隅に追いやり、元の
姿に戻ったシャリは剣が当たった個所を鏡で見る。

皮膚は赤くなってさえいなかった。

きっと、この魔女の体は剣や猫の爪を無効にするだけではないの
だろう。

真冬の凍えた水、呪いの手紙……たぶんそれも慣れと運だけでは
なかったのだ。

首を刎ねられたら、もしくはそれと同義の致命傷を負わされたら
どうなるのか？

きつと武器や毒等が身体へ届く前に、一呼吸の必要もなく弾く。
そんな気がする。

シャリは自分の手をじっと見た。

何だか前よりもカサカサがなくなっている。

古い皮膚が剥がれ、新しいもので覆われて、そしてまた……を繰
り返していく。

小さかった頃に比べれば背も伸びたし、そして老いも漠然とだが想像出来た。

生かされている、生きている以上は生きていくと思っていたが、自分に死が来ないとは考えた事もなかった。

自分は不老不死の魔女ではないとシャリは思う。

ゴトルーが帰って来て、シャリは飛び付いた。

横抱きに抱き上げてもらえたので、ぎゅーっと首にしがみ付いた。

「熱烈歓迎は嬉しいですが、傷が痛みますか？」

シャリは首を横に振った。

その逆だから、ほんの少しだけ悲しいのだ。

大勢と自分が違う事が、ゴトルーと一緒にではない事が……。

こんな風に説明する事が多いなと思いつつ、今回も結局ゴトルーに話した。

話している間に、シャリがゴトルーに飛び付いた扉付近から、寝台の上へと場所は移動したが、いつもと変わらず髪や頬を撫でられる。

「シャリがそう感じるなら、きっとその通りなのでしょう。私からすると貴女が痛みや辛さを感じずに済むのは喜ばしい事です。」

付け加えるなら貴女は長生きするだろうが、それでも人の域を出

ないはずです。

例えば王が国を治める者として生まれた様に、シャリは魔女として生まれ付いただけであり。

大きく捉えれば、どちらも同じ人間だと私は思っています」

「魔女も人間？」

「そうです」

尋ね返したシャリにゴトルーはしっかり肯定したが、いまひとつ納得がいなかった。

でも前々から不思議に思っていた事が分かった気がする。

カジユ家の面々はきつと魔女としてではなく、ゴトルーと同じ様に一人の人間としてシャリを見ているに違いない。

「こうしてシャリと会えたのが、今で良かった。小競り合いの最中だったら、私は酷い人間だから、貴女の力を利用しようとしていたかも知れない。少なくとも一考はしていたはずです」

「利用、出来た？　ゴトルーの役に立つなら、今からでも私を使っている」

「絶対に使いませんっ！」

ゴトルーに大きな声で断固拒否されて、シャリはビックリし、そしてガッカリする。

「それに誰にも貴女を使わせたりはしない。

……シャリは魔女と呼ばれる事で危険から少しは守られていたのかも知れませんね。

迂闊に魔女へ助力を求めても自らの首を絞める結果となる、そう思われていますから」

そんな風にも考えられるのか、とシャリは思う。
それは新たな考え方だった。

しかしゴトルーは吐き捨てる様に続ける。

「王宮での貴女への仕打ちを考えると、魔女と呼ばれていて良かったとは、口が裂けても言えません」

いつの間にか、ゴトルーのシャリを撫でる手も止まっている。

ゴトルーが魔女の為に怒る必要はないと、その手をきゅっと握った。

「王宮で、私はゴトルーに会えて良かった」

「……、……そうですね。そうでした。もう我が家にいるのだから、ゆっくりと身体を回復していけばいい。残念ながら本来姫君が取り囲まれていた贅沢を、貴女に堪能させてはあげられません」

そんなものは望んでいないと、シャリは笑う。

シャリの物だと言われても、相変わらず勿体無い気持ちがあるままなのだから。

「話題を変えても……?」

シャリが頷くと、ゴトルーに尋ねられる。

「ビスとの間に割って入られた事、不快でしたか？」

その質問にシャリは首を傾げた。

それからその時の気持ちを思い出して、横に振る。

それ自体が嫌だったのではないのだと、再び説明した。
するとゴトルーは難しい顔をする。

「なるほど。私があの者達の師、ですか。貴女がそんな風に思っているとは気付きませんでした。やはり尋ねておいて良かった」

シャリの指先を撫で擦りながら、ゴトルーは少し考えた後、口を開く。

「まず先に言い置きますが、貴女の事がなくても王都からは早々に立ち去りたいと思っていたのは本当です。

シャリに会った事で、少々その考えが強くなっただけで。

……私の所に寄越された者達は見習いとなっていますが、もう何年も前から心得も技も既に教わり、騎士となるべく雑務も鍛錬も重ね、後は派遣先が決まるのを待つばかりです。

師と呼ぶ人物は既に見つけられていると思います」

「でも……」

シャリが反論しかけると、ゴトルーも頷いた。

「たぶんあの者達の派遣先は、タープの様な国境の辺境か、領土の境目か、もしくは身内同士で争っているとか、とにかく何かしらの火種を抱えている場所が多くなるでしょう」

「……」

「私の場合、元々自分の巢を守る為に踏み止まり、少々無茶をして仕掛けたりする気にもなれましたが。」

派遣先で馴染めてもない内に戦わなくてはならなかったり、上官が糞……おっと失礼しました……だったり。

正直、私がそうだった様に動けと教えるのは無理がある。

かといってあの者達が騎士となる以上、むやみに逃げる事を勧めるわけにもいきませんしね。

実際の現場で血と死と後悔を引き摺りながら、どこかでは諦めるなり、開き直るなりしてもらえない。

私の話がどれだけ通じるか、いっそも言わないのが華なのか、今回の勤めに対してやる気があればあるほど、悩んでいたと思います」

こんなに大きくて、例えばどう体当たりをしても、どんな内容の話をしても動じないゴトルーなのに、悩んだりする事もあるのだとシヤリは何となく安心する。

「私も……王都からは出た事がなくて、現場の悲惨さを全く知らないけれども。」

行かなくてはいいけないと決まっているなら、得られる機会があるなら、表面上の知識だけでも得ておきたいと思う」

シャリだって、ユイナが持って来てくれた観光案内書でかなり想像が膨らんでいる。

「何か思う事があれば、勝手に頭へ留め置くだろうし。実際の現場で思い出さ出さないかどうか、それは分からない。

そういえばあんな風に言ってたなと思い出したとしても、ゴトルーの言葉を頼りにするか。

それともそれを否定したり展開させて、自分ならこうすると思うかだって、最終的にはその時と状況次第。

……ゴトルーも名前を覚えてたって事は、きっと何かは伝えるつもりだったはず」

「読心も出来るのですか、私のシャリは？」

そう言いつつも、ゴトルーはあまり驚いた顔をしなかった。

きっとシャリでも考えられた事だから、ゴトルー自身も既に考え、そしてもしかしたら見習い騎士達の教官を命じた誰かからも言われ済みなのかも知れない。

話題は最終的にシャリの事へと戻る。

「ニコの事はともかく、ビスの事は面白がっていましたね？」

痛

みを感じないとしても、私はあの光景を見たくない。貴女が面白がっていないければ、始めから止めに入っていたのですが……」

ニコというのは、たぶん女性見習い騎士の名前だろう。

「貴女は意外と、好戦的な一面をお持ちの様だ」

「魔女だから……？ でも売られた喧嘩以外は買わない？ よ。たぶん」

「普通の姫君ならご存知なさげな言葉も使うし、一体どこで耳にしたのやら……」

ああ、いえ。貴女が思う様に口に出して下さい。悪い意味ではなく、そんなシャリも私は楽しんでますから大丈夫ですよ」

ゴトルーの手がシャリの指先を離れ、頬をなぞり始める。

その事にシャリはドキリとした。

「……魔力が集まっているなら私でも分かるかな、試してみましよう」

生地や造りは圧倒的にカジユ家で用意してもらった物の方が良いのだが、相変わらずシャリは変化時の着脱がしやすい様に、襟元の開いている服を着ている。

その襟元を更に開かれて、鎖骨の下をゴトルーに舐められた。

「……っ」

「駄目だ、分からないな。……シャリ。私が触ると、もう眠いだけではありませんよね？ 痛みを感じないというのはある意味好都

合だろうが、全く何も感じてもらえないではさすがに寂しい」

違う所も舐められ、舌を這わされて、シャリはピクツと体を反応させる。

「貴女がどんなに体を鍛えても、私からは離れられないと思わせてみせますよ、愛しいシャリ」

宣戦布告みたいな声で、ゴトルーに言われた。

会話（後書き）

以下、余談です。

ゴトルーは共倒れも辞さない人間から、シャリが狙われる可能性もあると考え付きます。

ターブへ帰ると立場上ますます、常時自分が守るのは不可能だと気付き。

シャリの性格と、変化する性質を考えると、どうしたって常時は無理ですが、不安に駆られたゴトルーはシャリに騎士を……と思う様になります。

しぶしぶで。

圧倒

次の日、鍛錬場へ降り立とうとしたシャリだったが、いつもの定位置で睨み合っているニコとビスに気付き、別の隅へと向きを転じた。

……のだが、どうやら二人はシャリを待っていたらしく、怖じ気づきたくなる様な勢いで駆け寄って来る。

「おい、昨日の……」

シャリの所へ到着したのはビスの方が若干速かったのだが、結局もごもごと言い淀み、その隙にニコが怒涛の如く謝り出す。

「ごめんね、使い魔ちゃんっつ。昨日の、そんなに痛かった？　ぎゆうしたら逃げちゃうんだもの、よっぽどだったんだよね？　ごめんねごめんっ。大丈夫っ？」

痛かったどころか魔女の体について再認識しただけだったのだが、どうも心配させてしまった様だ。

シャリは問題ないと宙返りして見せる。

「良か……。いや、べ、別に俺は心配なんか……」

「もう大丈夫なのねっ！　この野蛮人がこんなに可愛い子相手に本気でやるからっ。でもこれからはアタシが使い魔ちゃんを守るから安心して！　昨日からそうしてれば良かったのに……勇気がなくてホント、ごめんね……」

売られた喧嘩を買ったのはシャリだし、使い魔など見て見ぬ振りが正解なのだ。

昨日までも今日からも。

力説されたかと思えば、しょんぼりとされてしまい、何だか返って申し訳なくなったシャリは一声鳴く。

それだけでニコの気分は浮上したらしい。

「使い魔ちゃんは優しいね。それにちゃあんと人間の言葉を理解してるんだ〜っ」

それに関してはどう反応して良いものか、困った。

まさかここで魔女本人ですからと、元の姿になるのは遠慮したい。けれど魔女本人でもニコがこんな風に言ってくれるかどうか、知りたい気もした。

すると今度はビスも尋ねて来る。

「通じてるだろう、使い魔なんだからな。でもまあ話が通じてるなら、ちようどいい。おい、なんで昨日爪を出さなかった？　というか、爪。あるんだよね？」

猫の姿なのだから、当然ある。

だが猫パンチした理由は特にない。

どう応戦しようとは考えていたが、何でというのは考えていなかった。

ビスは剣を持っていたから、猫の爪で服や皮膚が傷付いたらどうしようとも思っていなかったはずだ。

チラッと爪を見せたものの、結局またシャリは困ってしまう。

「もういい。使い魔というのは好戦的なわりに、思っていたよりも他傷願望が強いわけではないんだな。おい、そんなに魔女の使い魔などやっていられるのか？」

「あ。それはアタシも聞きたい。魔女に苛められたりしてない、使い魔ちゃん？ もしかして魔女に対抗する体力を付ける為に、こうして鍛錬してるの？」

「おい、そうなのか？ あ……いや、別に心配してるわけじゃ……。というか俺の剣が当たるぐらいじゃ、魔女相手なんか絶対無理だろう」

「どうしよう、使い魔ちゃんを守るんだって決めたばかりなのに。守れるかな……ううん、守ってみせるわよっ！」

「……こっそり逃げるのは無理なのか？ お前一匹ぐらいなら俺が匿って……いや別に心配なんかしてないぞ、俺は」

「だったら引っ込んでいて、野蛮人っ。使い魔ちゃんはアタシのなんだから……っ」

「いつ貴様のものになったというんだ！ で、どうなんだ？」

二人の会話に圧倒されつつも、とりあえずシャリは首を横に振る。

しかしまだ質問は続いていた。

「あゝ、良かった。じゃあどうして鍛錬してるの？ 逆に魔女を守る為の力が欲しいから？ ……というか魔女なんかを使い魔ちゃんを守る必要ないんだからっ」

「おい、お前。騙されているんじゃないだろうな？ もしかして弱味でも握られているのか？」

魔女だけを悪、使い魔は庇護対象。

魔女と使い魔を切り離して考えてくれるのは、本来ありがたい事なのだろうが、その魔女本人であるシヤリは何やら居た堪れない気分になってしまい、そっとニコとビスから距離を取ろうとした。

しかし……。

「待って、使い魔ちゃん！」
「おい、どこへ行く！」

無理だった。

カジュ家の三人

午前中はニコとビスに挟まれる形で鍛錬を終えて、今度はカジュ家でユイナ・ホルマ・サッドからの話が待っていた。

昼食を食べ、その後のお茶が運ばれて来て、一息つき。
まずユイナが話し始める。

「シャリ様は、ゴトルー様がお好きなのですよね？」

唐突な質問に、それでももちろんと頷いたものの何だろう？
今更やはり魔女では困るという話ではなさそうなのだが……。

「……もう嫁がれて来られた日の様に、出て行かれ様とはなされませんよね？」

それにも頷く。

ニコとビスからのものとは違い、是か否かで答えられる質問は簡単でいいと思う。

するとユイナはにっこりと笑ってくれた。

「良かったですわ、それを聞いて置かなくては安心して謝れませんもの。」

もうシャリ様も分かっているらしいやと思います、ゴトルー様は何があってもわたくし共を鞭で打つ様な方ではありません。あの時、嘘について申し訳ありませんでした」

ユイナに続いて、ホルマも頭を下げて来る。

「確か自分がそう言い出したんですよ、すみませんでした」

そういえば嫁いで来た日、そんな風に引き留められたのだと思ひ出す。

確かにゴトルーは見た目通りに怖い面がある人間に違いないのだが、ユイナやホルマに体罰を与える事はないだろうとシャリは思う。

だからユイナとの約束はすっかり覚えていたが、体罰云々の方は忘れていた。

謝られて、結局午前中の様に困ってしまう。

だが今はこうして元の姿で喋れるのだし、この際シャリも今まで言えていなかった事をちゃんと伝えて置こうと思った。

「魔女なんかを、そこまでして引き留めてくれて……ありがとう」

もしユイナやホルマが反対していたなら、ゴトルーも無理に黒を家に入れようとはしなかったはずなので、お礼を言う。

「……。……ゴトルー様には内緒ですけど。わたくし、シャリ様はやはり少し人とは違うと感じる時があるのです。

不思議な力の事以上に、その御心がとても無垢で清らかに見えて。魔女というより、聖女の様だと」

「……聖……女……」

魔女としては拒絶反応を示すべき言葉だと、シャリは凍り付く。

それに気付いている様なのに、ユイナはここぞとばかり続けて来た。

「これまでとてもお辛い目に合われていたはずなのに、歪まれていなくて。

悲しい環境でお育ちになったのに、どうしてシャリ様の様な心根を保っていられるのか……わたくしにはその方が不思議ですわ」

ゴトルーとビスから続けて好戦的と称されてしまったし、ユイナが言っている様な事はないと思うのだが……そう見えてしまっているなら。

「……もっと魔女らしい言動がとれる様に、頑張るっ」
と、シャリは意気込んで見せた。

「まあっ」
しかしユイナはまるで怖がる様子もなく、むしろ楽しそうな声を上げる。

「でも、そうですわね。ゴトルー様がお変りになられたのですから、シャリ様だって悪女になれるかも知れませんわね」

魔女の前に、悪女？ 悪女って、具体的にはどんな風にすれば？ と聞いてみたい気持ちもあったが、ゴトルーの事の方に興味がある。

「ゴトルー、変わった？」

「ええ、それはもう。ゴトルー様が猫の姿のシャリ様を連れてお帰りになった時も驚きましたが、ここ最近のご様子といったら……うふふ」

その言葉にホルマも賛同した。

「自分は旦那様と幼馴染ですが、少なくとも小動物を可愛がろうとする様な奴ではありませんでしたし、ターブ一帯の事は考えても、それ以外に対する独占欲なんてこれっぽっちも持たない奴だったんです。」

それがシャリ様に頬は緩む、自分達に嫉妬はする。

ユイナさんはシャリ様と何を約束したんだって、睨まれてましたしねえ」

「睨まれたといえば、シャリ様が敬称を取って欲しいとわたくし達に願われた時も。」

頷いたら、それこそどうなるか分からない様な鋭さで……うふふふふ。

それにゴトルー様はあんな風にお話になる方ではありませんでしたのよ」

「そうそう。あの外見でそれを苦にもせずやってる調子がまた、涙ぐましいというか。」

とにかくシャリ様に好かれようと自動的になっちゃってる旦那様が、もう自分的には笑えますけど」

「一度シャリ様をお返ししてしまった時のゴトルー様といったら…」

ですからもう一度シャリ様を王宮から拉致して、ショウプの家まで攫いたいと相談された時は…やはり、と思いましたの。そう仰るに違いないと思っていたとっ」

「ホント…それでこそ、旦那様！ でしたよっ。

このままシャリ様を捨てて帰ったら、もう旦那様とは呼んでやらねえと内心思っていましたからね。

あゝしかしそうなたらそうなたで、ゴトルーの奴は余計に喜びそうだなあ。

結果的には行動に移す前に、望んでいた通りに落ち着いたわけですが」

そこまで黙っていたサッドがむつとりと口を挟む。

「全く儂の料理には相変わらず表情一つ変え様とせんのに、けしからん」

「まだそれを言っていたの、サッドは。あれはもう仕方ないわよ」

「逆にどんなに不味くても、食えれば何でもと表情を変えない奴です」

「ふんっ。いや、儂は諦めんぞ」

カジユ家の面々の新たな一面を見せてもらった気がした。

小さい頃から、そして小競り合いの最中にも側にいたのだろう三人にとっても、ゴトルーは決して怖がるだけの対象ではなく、むしろ好かれているのだと分かってシャリは嬉しくなる。

そしてきつとそんな外見通りの言動しかして来なかったゴトルーが始めて連れて帰って来た猫だったから、黒でもシャリはカジュ家に受け入れられたのだろう。

しかも当然の様に、サッドの矛先はシャリへと向けられて来た。

「シャリ様にも。これからまだまだ、美味しい物を知ってもらいますからなっ」

そうか、まだまだなのか……楽しみの様な、お手柔らかにと言って置くべきなのか。

何だか考えるだけで、お腹がいっぱいになりそうだった。

カジュ家の三人（後書き）

二章続けて、和気あいあい。

ニコとビス

そして今日もシャリは鍛錬場で、ニコとビスに挟まれていた。

「あのね、使い魔ちゃん。アタシね、お姫様を守る騎士になりたくてね、ここへ応募したの。

素敵な恋物語の様にお姫様と相思相愛になって駆け落ちは出来ないけど、その手助けだってしてもいいかなって」

「本気で考えてるなら、貴様は阿呆だ。姫は政略結婚と相場が決まっている。駆け落ちなど許されるはずがないし、万が一そうなら国交に傷が付く。傷だけなら済めばいいが……云々」

本日のお題は将来の夢らしい。

シャリはゴトルー以外、基本聞き役に回る事が多く、今は特に猫の姿なので言葉は出せない。

シャリの代わりというわけではないだろうが、夢見るニコとビスが現実を述べる。

「野蛮人は黙ってて、と言いたところだけど、確かにそれはマズイと色々学んだり、実際目の当たりにしちゃったの。

だけど可愛い物に目がないアタシは例えお仕えするお姫様の政敵側に、好みの物を発見しちゃったら、もう止まらなくなりそうだし……。

逆にお姫様が完全に好みだったら、例え国がどうなるうが！ だ
けどね。

こんなだから、きつとこっちに回されちゃったんだろうな」

そうか……もうゴトルーの所に回された見習い騎士達は、我が身
がどんな場所に派遣されるのかを察しているのだと、ニコの言葉を
聞いてシャリは知った。

それにしても可愛いものの基準がかなり間違っていそうだが、そ
ういう意味ではニコはゴトルーのご同類という事になる。

「それでね、使い魔ちゃん！ アタシ考えたんだけど、使い魔ちゃ
んのご主人もよくよく考えれば一応お姫様でしょ。
使い魔ちゃんを見てる限り、魔女であるお姫様にお仕えるのも、
そう悪くないんじゃないかなと思って来たのよ。雇ってくれないか、
聞いてみて欲しいの」

それに対してシャリは驚いただけだったが、ビスは何か思うところ
があるらしく、真剣味を帯びた低い声で問い掛ける。

「本気か、ニコ？」

「噂や言い伝え通りの魔女なら、ちょっとした火種地域に派遣され
た方が生存確率は高いかもね。

そこへ勤めたいだなんて冗談なんかじゃ言えないわ、うん。

でもアタシはどっかの野蛮人とは使い魔ちゃんへの愛の深さが違
いますからっ」

最後の方は茶化した感じではあったが、ニコもビスに負けず劣らずの目をしていて、シャリは段々心配になって来る。

「なあに、使い魔ちゃん……じつと見たりして？ ああ大丈夫よ？ 使い魔ちゃんが側にいると思えば、ちゃあんと魔女様にお仕えますすともっ」

更にシャリはニコをじつと見続けた。

「ありゃ？ そういう事を聞きたくて見てるんじゃないのね。んゝ何を心配されてるのかなあ、アタシは？」

シャリはそこで、ニコを指差した……猫の手ではあるが。ちゃんと伝わったらしい。

「アタシ？ アタシ、を？ 心配してるの？」
そこまではちゃんとニコに伝わったらしい。

正確にいうと、現時点でビスの事も心配している。

シャリと関わる様になってから、どうも二人が他の見習い騎士から距離を置かれている様なのだ。

ニコは元々唯一の女性という事もあった、浮き気味ではあったのだが、それに輪を掛けている。

少なくともシャリの周囲にはいつも見習い騎士達から距離が開いて、そこへ逃げても逃げても入って来る二人も、同じ様な状態になってしまっているだけかも知れないが。

それでももし本当に魔女に仕える事になった場合、果たしてニコがどんな風に言われるのか……。

たぶんゴトルーが魔女を助けたとされる一件よりも、酷く言われてしまうだろう。

王宮へ来ても鍛錬ばかりで、実際耳にしたわけではないが、理由はどうかあれ魔女を花嫁にした事で、更にゴトルーは悪し様に言われている気がする。

ゴトルーに続けて、ニコまでも……というのは嫌だった。

それに、だ。

シヤリは騎士を必要としていない。

だからニコの申し出はそもそも外的が外れているわけで、採用する事などないのだから真剣に悩む必要はない。

そう考えてシヤリの気分は軽くなった。

近々、自然と別れが来て、ニコは派遣先でまた好みのものを見つめるだろう。

少なくとも、黒ではないものを。

シヤリはニコを見るのを止めた。

「あつ、ちよつとちよつと！　今、アタシに壁作ったでしょっ？　アタシは諦めないわよ！　そしていつか思う存分、ぎゅゅっ」と。例え本当の姿がどうでもだからねっ！　……フッフ」

唐突に伸ばされた手をシャリは辛うじて避ける。

ニコの手が、ついでにその企み顔も怖い。

猫の姿でいる時に抱き締められた日には、そのまま絞め殺されそうな勢いだ。

思わず身震いし、そろりそろりと後退していたシャリをビスの聲が引き留める。

「おい。ついでに俺の話も聞け」

「はいはい、拝聴致しましてよく。まさかアタシの二番煎じする気じゃないわよね？」

ニコがふんつと鼻を鳴らすと、ビスは何やら必要以上にでかい態度で、鍛錬場に聞こえる様に高らかに宣言し始めた。

「誰が貴様らと慣れ合うか！ ……いいか？ お前はゴトルー殿を監視し、そしてそれを俺が更に監視する。不穏な動きがあれば、俺はお前を切る。

例えばそれで黒い穢れを浴びる事になろうとも、側で監視する事自体で呪いを受けようとも、その事で終生周囲から弾かれようともだッ！」

穢れ、呪い……魔女らしい響きといえばそうなのだろうが、どうも複雑な気分だ。

それにしても喧嘩を売って来た日には確かにそう考えていたのだ

ろうが、未だに本気でビスがシャリをそんな風に感じているとは思えなかった。

案の定、格段に声を落とし、ビスが言ってくる。

「どこかの小競り合いで手柄を立てて、それを重ねて名声を得るなどという下らんものはもう捨てる。

とにかく俺にしろ、ニコにしろ、自らが望んでそうするのだ。

お前にどうこう言われる筋合いも、ましてや気に病まれる必要など……いや、誤解するなよ。

だからって断じてお前を心配してるわけじゃ……」

そして最後に、お決まりの言葉を付け加えて。

すると今度はそれを無視したニコがビスに対して、低く問う。

「……何それ？ もう本決まりなわけ？」

「五割にもまだ届かん。だが……」

「ふん」

それっきりニコもビスも考え込んでしまい、二人に挟まれているのはいつも通りなのに、何やらシャリは落ち着かない気分のまま午前中を終えた。

ニコとビス（後書き）

どう動くか、目を付けさせてもらおうか。

正体

結局また、シャリはニコとビスの話をゴトルーに聞いてもらっていた。

「監視者とは、ビスは上手い位置を持って来ましたね。

それに……これは内密ですが、私は王への謁見の際に見回りルトも記したターブ地方の地図を献上しました。

それが本当か確認する者を国としては遣わさねばならない。

ビスは四男ですが、代々国王から信頼が厚く、覚えも目出度い家柄です。

彼の希望はそのまま通るでしょう」

今のシャリはというと、ゴトルーの膝の上で横座りをしている。手櫛で髪を梳かれるのが心地好くて、上体もゴトルーに預け切っていた。

「……内密なのに、聞いてしまった」

「シャリもカジュ家の一員でしょう。問題ありません。

……さて、ニコはどう希望を通して来るでしょうね。

私としてはビスが貴女に付くというなら、彼女も一緒の方が嬉しいですが」

シャリが首を傾げると、ゴトルーが言う。

「私が側にいられないのに、貴女とビスは部屋で二人きりなど許せませんからね」

ついこの間、ユイナとホルマからゴトルーにも独占欲や嫉妬心があると教えてもらったばかりだったので、シヤリは思い出し笑いを浮かべた。

「シヤリ、上を向いて……顔を見せて下さい。ああ、やっぱり笑ってましたね。こんな私が可笑しいですか？」

「ゴトルー、大好き」

ゴトルーの顔が近付いて来て、一頻りキスを注がれる。

「貴女に誑かされる自分を私は良しとしてますけどね。そんな理由ですが、とりあえず誰かからニコの処遇に対する意見を求められた場合は推します」

「でも、ゴトルー。私に騎士は必要ない。それにニコとビスに、私が魔女だって明かさないと」

ニコが可愛いと表し、ビスがどうやら心配しているのは、あくまでも使い魔なのだ。

その使い魔が魔女本人でも気持ちを变えないでいてくれるか、シヤリにはその自信がない。

「無理に主従関係を作ろうとしなくても良いと思いますよ。

なんなら私が勝手に扱き使いますし。

シヤリが構わなければですが、これ以上あの二人が話を進め様とする前に、正体を明かしてみますか？」

派遣先が決まってしまうえば、もうやっぱり辞退したいとは言えないだろう。

ただの勘で、樂觀的観測かも知れないが、ニコとビスは魔女と使い魔が同体でも、カジュ家に迷惑が掛かる様に騒ぎ立てはしないとシャリは思う。

たぶんゴトルーも同じ様に考えているからこそ、そう尋ねてくれたのだろう。

正体を明かすなら、早く済ませてしまいたかった。
意を決して頷こうとしたシャリに、ゴトルーが意外な言葉を付け加える。

「もしかしたらもう、その必要がなくなっている気もしますが」

「……えっ？」

「ですが今の姿は噂を聞いての想像しか出来ていないでしょうし……」

そこでゴトルーは一度言葉を切った。

更に全身から物騒な気配が伝わって来て、今の会話でゴトルーが怒る様な事があつただろうか、シャリは考えてしまう。

「……私もシャリに対するあの二人の反応が見たいので、これ以上話が進んでしまう前に明かしてみましようか？」

早く明かす自体には何の反論もないので、ゴトルーの様子を怪訝に思いつつシャリは頷いた。

結果、ニコとビスが元の姿のシャリと対面した時、「ああ、やっぱり」の気持ちだったらしい。

鳥か、猫か、それとも大きな化け物なのか……どれが本当の姿なのか……いやもしかするとそれ以外なのか？

魔女に対抗する気はなさそうなのに、逆に従っている感じでもない。

魔女を悪く言っても怒らず、庇う風もなく、苦笑いか居心地悪そうにしているのはなぜ？

何だかまるで自分が言われているかの様に……等々、二人とも思っていたのだ。

ただニコもビスもシャリを挟んでいる時にしか会話をしておらず、相手が本当に信じられる人物なのか確信が持てなかったのだそうだ。

だから意見交換もする事がなく、お互いにこいつの前でシャリに正体を明かさせるのは止めておいた方がいいだろうと、これまで面と向かって「魔女本人？」とは聞けずにいたという事だった。

正体（後書き）

ゴトルーはビスが横恋慕して来ないかどうかが一番心配でした。

家

それから数ヵ月後、シャリは王都を離れる事になった。

年に数回行われているターブ地方の見回り時期が迫っている為。
そして生まれ育ったショウプの方がゴトルーの魔女を封じる力が
安定するだろうという事で、シャリも一緒に行けたのだ。

ターブ地方には集落が点在しており、いくつかの集落をまとめて
何々地区と呼ばれ、その地区ごとの代表者が見回りに参加している。

見回りは言葉通りに見て回るのだが、時にターブ以外の者が建て
た小屋を発見する事があれば、それを燃やし。
菌向かって来る山賊や不審者がいればそれを殺し。
そして各所各所にターブ地方の旗を立てる。

今回からは国から正式に騎士が随行する様になり、国旗をも立て
る事となった。

ゴトルーが国に献上した地図及びそのルート検証を任されたのは、
ビスである。

結局ニコとビスは元の姿のシャリに会った後も、鍛錬場での言葉
通りに希望を出し続けたのだ。

元の姿で顔を合わせた後のニコは一層喜々としていた気がする。

魔女付き騎士の決定打にニコが出して来たのは、魔女と使い魔に

対して友好的に接し、人間との間に波風を立て難くする。

そしてゴトルーが居ない時にいざ魔女が完全な魔と化した時には、その身を持って封じるという事だった。

鍛錬場で使い魔がニコに抱き付かれて悲鳴を上げた、もしくは触れられ様とするたびに逃げていたという見習い騎士達の証言があり。つまりニコは魔女が苦手とする身体を持っていると、結論付けられたのだ。

少し遡って、ニコとビスが魔女付き騎士へと本決定した日。

「魔が苦手とするのって、やっぱ聖だよねっつ。アタシってばもしかして聖女様？」

「貴様のどこがだ」

笑みで形相を崩したニコが言った言葉に、ビスは冷たく言い返していたけれど。

黒なんかへ、これほど呆気らかんと抱き付こうとして来るニコにこそ、聖女という言葉は相応しいとシャリは思ったものだ。

なのでその時、その場が鍛錬場だった為に、猫の姿で下からニコを見上げてしまい。

「ま。待って待って、シャリちゃん。今のはただの冗談だからっ！ビスの反応の方がまだ正しいからっ！　　そんなキラキラした目で見つめられると……アタシ……っっ」

と、飛び付いて来たニコを咄嗟に避けなくてはならないという事もあった。

ニコが他意なく、ただの可愛さからこうしてくれているのは分かっているのだが、相変わらずどうしても体が逃げてしまう。

勢いよく追われ、その条件反射として逃げる、そんな感じだ。

喧嘩を売られれば受けて立つというのに、きっとシャリは天邪鬼なのだろう。

「くっ。諦めないわよ。これでずっと一緒にだもんね、シャリちゃんっ」

ニコがいらぬ闘志を燃やした。

「お前も大変だろうが……いや、別に心配はしてないぞ……だが何だ？ えーっとだな？ 俺共々よろしく頼む。そういう事だ」

「ちよっ。何、綺麗にまとめてんのよ、ビスの癖にっ！」

「貴様こそ聞き捨てならんぞ、ニコ。ビスの癖にとは何だ、癖に、とはっ！」

という一幕も越えて……。

賑やかになると思われた、ターブ地方への道のりは意外と静かだった。

ニコとビス、そして特にシャリが王都から出た事がなかったせいだ。

基本的にシャリは鳥の姿をとっている為、魔女を乗せているとされる馬車の中身はカラだった。

ついに王都から飛び立ったのだと、シャリは大空を翔けるのに夢中になってしまい、途中何度も離れ過ぎだと呼び戻されながら、シヨウプの家に辿り着いた。

基本的にユイナ・ホルマ・サッドが世話を焼いてくれるのは一緒なのだが、タープの見回りの件以外にも家族や知人やらがやって来たりと、王都の屋敷に比べて人の出入りが多い。

ニコとビスはカジユ家の面々に付いて回り、それらの人々と顔合わせをしたり、日々の雑務を覚えていくらしい。

シヨウプに来た当初はシャリも大人しく、こっそりとその様子を眺めているだけだったが、結局新たな縄張りを見聞しついでに、本物の犬猫とやり合い、タープの空を飛んで回った。

王都とは違う、タープの大自然はシャリの魔力と上手く調和しており、変化時間が更に伸びている。

そして気が付けば飛び過ぎて、うっかり夕暮れになる事があり、そうすると一同の怖い顔がシャリを待ち構えている羽目になった。

そうして外へ出ているうちに、シャリはタープでは黒以外にも怖れられているものがある事を知った。

山や川、大自然への畏怖。

それに付随する木霊や濃霧、岩陰に隠れ、目に見えなくても昔から存在すると信じられているもの達。

そんな言い伝えの中に魔女も含まれていたのだが、それより何より、自分達の居場所を荒す輩共という明確な敵がいた。

ターブの人々が黒に対してどんな反応をするのか、それを連れ帰ったゴトルーが何か言われてしまうのではないかと、当初シャリは気懸かりだった。

それと同様にターブの人々も魔女という響きが不吉なものに思えて、不安だったらしい。

しかし実際目にして見れば……輩共に比べ、魔女は全く害がない。王都からやって来た、二人の騎士は何ら魔女に対して警戒していない。

何より黒への怖れよりも、これまで率先してターブを守って来たゴトルーへの信頼の方が大きく上回っている様で。

シャリは確かに黒いものではあるが、あのゴトルーがついに迎えた花嫁として、まずショウプの人々に、最終的にはターブ一帯で落ち着いてしまった。

それを肌で感じ、シャリも大っぴらに……といっても大概において猫の姿でだが……ニコやビスの真似をして、カジュ家の面々に付いて回った。

しかも今回は、ゴトルーの見回り仕事にも連れて来てもらう事が出来た。

シャリとしてはそんなつもりはないのだが、放って置くといつか本当にそのまま帰って来ないのではないかと、相変わらずゴトルーに思われているらしく、それで見回り同行に許可が出たのだ。

「……ところで、シャリ」

夢にまで見たとは大袈裟かも知れないが、ゴトルーの肩口の後頭部を預けながら、猫の姿でシャリは温泉にぷかぷかと浮かんでいた。確かに観光案内書に出ていた様に、普通のお湯よりも温泉の方が滑らかで優しく思える。

「ここは王都の屋敷とは違って充分余裕がありますから、元の姿で入った方が気持ちがいいですよ？」

「つつ!?!?!?!」

その言葉を聞いて、シャリは危うく温泉で溺れ掛けた。たぶん咄嗟にゴトルーが引き上げてくれていなければ、確実にそうなっていただろう。

王都で一緒に入っている時から、猫の姿なのだから深くは考えない、そしてゴトルーも考えていないと自己暗示を掛け、すっかりくつろいでいたのだが、それを一気に解かれた気分だった。

元の姿という事は、ゴトルーは端からそうではあるが、二人で全

裸になるわけであり。

その状態であちこちキスをされたり触られたりすると、シャリは変になってしまうのだ。

それはつまり、ベットの上でしている様な事をお風呂でも……？

無理、絶対に無理っ！

ここはお風呂で、安らぐべき場所のはずだっ！

シャリは断固拒否を示すべく、首を何度も大きく横に振った。

けれど一旦は残念そうな表情をしたゴトルーが、段々癡猛そうな顔付へと変わる様をシャリは見たのだった。

小話その一

王都の屋敷にいた頃、魔女らしい言動をと意気込んで見せたシヤリだったが、シヨウプに來た今でもその気持ちは変わっていない。

計画その一、ホウキに乗って空を飛ぶ！

「……っ」「……何で？」「……………」

残念ながら、シヤリは飛ぶ＝鳥の姿に変化する、と体内に組み込まれているらしい。

鳥になってしまったび、元の姿に戻っては服を着直し……を何度も繰り返して頑張ってみたが、ついに成功しなかった。

計画その二、火の周りで怪しい踊りを踊る！

計画その一のように比較的親しみやすそうな魔女を目指したのが、そもそもの間違いだったのだ。

夕暮れ時、刈った下草等を燃やしている焚き火を発見したシヤリは大急ぎで駆け寄った。

その周りで、目論見通りにぐるぐる回って飛び跳ね、くねくねする……注・猫の姿で。

「楽しそうですねえ、シヤリ様っ」

「私らも混ざろう交ざろうっ」

わーい！！

どこからか楽器まで持ち出して、踊るわ歌うわ。
ついでに晩御飯まで持ち寄って、と。

なぜか周囲はお祭り騒ぎになってしまった。

ちなみに啞然とするシャリの側には、いつの間にやら現れたニコ
が手をうずうずとさせており、むしろ恐怖を味わう結果になった。

計画その三、何か煮込みつつヒヒヒと笑う！

シャリとて別に王宮での様に、嫌悪されたいわけではない。

しかしっ！

このままでは何か悔しい。

どうにも納得がいかず、魔女の沽券に関わる気がして仕方ない。

その日シャリは頑張って、多種多様な物を狩ったり採ったりした。
そして台所の片隅を借りて、お湯が煮立った鍋に全てを放り込み、
おもむろにかき混ぜる。

もちろん笑みを作るのを忘れずに。

台所の主であるサッドを始め、鍋の中を覗いて来た面々の反応に
気を良くしていたシャリだったが……。

「いないと思ったら、こんな所に……どれどれ？」

横から伸びて来たスプーンが煮汁と具を掬っていき、それがゴトルーの口の中へ……。

もぐもぐ、ごつくん。

食中毒による下痢や嘔吐、最悪を想像し、固唾を飲んで見守られているゴトルーに、とうとうシャリは文句を言った。

「どうしてゴトルーはそんなに警戒なしに食べるの？」

「シャリが楽しそうだったの。いけませんでしたか？ それに私が貴女の手料理を一番に食べたかった」

「……ゴトルーの馬鹿っ」

そんな下らない理由で、またも計画頓挫……拗ねたシャリは鳥になって窓から飛び出した。

見た目はどうであれ、ちゃんと？ シャリが勘で毒のない物を選んでいた為、倒れなかったゴトルーを見て、その鍋をサッドが改良し、ショウプの新たな珍味になったのだった。

もちろんシャリはちゃんと家へ帰って来て、計画の続行を密かに誓った。

小話その二

今日もニコとビスは、二人でショウプの町を歩いていた。

そう、今日「も」である。

二人一緒の方が顔を覚えてもらいやすいはずだ。

一人では見逃してしまう事でも、二人一緒ならどちらかが気付くかも知れない。

重たい・大変だろうから、若い二人で行って来て欲しい。

何のかんのと理由を付けられて、二人で組まされるのだ。

始めはそんなものかな、それじゃ仕方ないかなあと思っていたニコとビスだったが、こうまで続くと作為的なものを感じる。

もしや、くっ付け様とされてる？

二人の脳裏に自然とその言葉が浮かぶ。

しかもゴトルーだけではなく、ユイナ・ホルマ・サッドまで共謀している気が……。

食事の席を横にされたのは単なる偶然と思っていたが、もしかするとこれも仕組まれた事だったのかも知れない。

「つまり問題はアンタよっ！」

「何だ、いきなりっ？」

「ビスがさつさと彼女を作って、シャリちゃんとうこうなるつもりはないってところを見せれば、アタシは余計な圧力を感じずに済むわけ」

分かる？

と、ニコはビスを見る。

「そうやって自分だけ他人事にする気か、卑怯なっ」

「卑怯で結構。アタシがぎゅうしたいのはシャリちゃんであって、アタシなんかお呼びじゃないのっ」

「そこまで言うかつ」

喧々囂々ではあったが、こうしてニコとビスが二人きりで会話を
する機会は否応なしに増えていくのだった。

……南無。

呼び声

真夜中、シヤリは誰かに呼ばれた気がして意識を浮上させた。

「この感じは、満月の夜、王都で感じた呼び声……」

王都の屋敷では月がそうしたのだと思ったけれど、どうも違う。違うが、前回と同じ呼び声だった。

しかもより明確に聞こえた気がして、再び瞼を閉ざさずにシヤリは外を見てみる事にする。

ゴトルーを起こさずに済ませたいのだが、それはいつも叶わないので、始めから言い置いてみる事にした。

「ゴトルー。私、少し起きるけど、ゴトルーはそのまま寝てて」
すると上体を起こそうとしたところで唐突に掴まれて、シヤリは引き戻される。

「これ以上、魔力を溜め様とする必要はないと思いますが……？」
「その為に起きるわけじゃない。ゴトルーは何か、聞こえなかった？」

「いえ。しかし貴女の事だ、気のせいという事はないでしょう。私も一緒に起きます」

失敗した。

思惑とは逆にかえってゴトルーを起こしてしまったと、シヤリは大急ぎで首を横に振る。

「やっぱりいい。もう聞こえないし、寝る」

「そうですか？ ……でもそうだな。せっかく目が覚めた事ですし」

良からぬ事を企む声で、ゴトルーがシャリに覆い被さって来た。

次の日、ゴトルーに「やっぱりいい」と答えたものの、昨夜の呼び声が気になったままのシャリはターブ一帯を上空から飛び回ってみた。

変わったところはない。

いつもシャリに力を与えてくれる大自然だ。

続けてシヨウプの町中も見えて回ったが、知らない顔はない。

そもそも王都では月からと間違えたくらいだったから、昨日の呼び声の主が人間かどうかとも疑わしかった。

でも考えれば考えるほど、声は悲しそうな気配を滲ませていて、本当に声の主が呼んでいるのが自分であるならば答えたいとシャリは思う。

そう思っていたせいだろうか……外を探し回っている時は全くだというのに、寝ている時に呼び声が聞こえる様になって来た。

「もしかすると自分と同じ魔女かもしれない」

シャリと同様に、魔力を溜めやすい夜に、誰か気付いてくれないかと声の主は呼び掛けているのではないか。

どんな風に過しているのだろうか？

悲しそうだという事は、王宮でのシャリの様な生活をしているのかも知れない。

そう思うと、シャリは居ても立ってもいられない。

日が過ぎて行く事に焦りを感じるシャリは、カジュ家のみんなが集まった食事の席で、ゴトルーに話を切り出した。

「あのね、ゴトルー。私、声の主を探しに行きたい」

食堂が一斉に静まり返った。

「しかし、シャリ。声が聞こえるのは夜だけなのでは？」

「うん。魔女である私が夜に外を歩くと、ショウプの人々が不審を募らせるかも知れないけど、どうしても、歩いてみたいの」

「シャリ……」

「飛ばないで、必ず誰かと一緒に行く。寝不足になるほどは歩かない」

すると……。

「シャリ様を不審がる者など、もうショウプにはいないと思いますけれど、ご不安でしたら、わたくしが一緒にしますわ」

と、ユイナが言い出し。

「あつ。アタシもシャリちゃんと夜のデートしたい！ 猫ちゃんに

なって行くんだよね？ 何なら抱っこで……むふふ」
それにニコが続く。

「夜道を女性陣だけでは万が一という事もありますから、自分も」
「儂は夜の片付けと朝の準備をしがてら、お帰りになった時にお茶と摘み物でも出しますぞ」

その上、ホルマとサッドまで乗っかって。

「俺も行きます……で、いかがでしょう。ゴトルー殿？」
そうビスが締める。

シヤリの味方に付いてくれた面々を見て、ゴトルーはしょうがないなという表情を浮かべた。

「シヤリ。先程仰った事、ちゃんと守って下さい。約束ですよ」

「みんな、ありがとう！！ ゴトルー、大好きっ！」

そうしてシヤリは夜に外を何度も回ってみたのだが、やはりそんな時に限って声は届いて来なかった。

きっとショウプからは遠く離れた場所に、声の主はいるに違いない。

そこで、シヤリはまたゴトルーに相談を持ち掛けた。

「そう言い出すだろうと思っていました。ここで駄目です、言ったら貴女は今度こそ勝手に行ってしまうのでしょうかね」

「……」

ゴトルーにじっと見つめられて、シャリは言葉を詰まらせた。勝手に出て行きたくないから、こうして話しているのだが、反対されたらきつとそうしてしまうだろうと思う。

「探し出して、それで必ず帰って来る。約束するっ」

強固な意志を持って、負けじとシャリはゴトルーを見つめ返した。結局、譲歩したのはゴトルーの方だった。

「貴女は絶対に約束を守る方だから、その点は安心出来ますが……。せめて声の方向が分かってからにしませんか、シャリ？」

確かにそれが正しいのだろうが、これまで散々探して手掛かり一つ掴めていないシャリとしてはその提案には頷けなかった。

答えないでいると、再びゴトルーが問い掛けて来る。

「ターブを中心に探索範囲を広げていくつもりですか？ それはいくらなんでも変化が解けてしまうでしょう？」

「寝ずにずっと起きていれば、きっとすぐ方向も……」

すると俄かにゴトルーの表情が険しくなった。

「どうやら私は貴女を鎖に繋いで、監禁しなくてはならない様だ」

「えっ……、と？ 睡眠不足禁止はシヨウプでの約束で……」

「して欲しい様ですね、シャリ」

「……」

ゴトルーが怖い。

反論を試みたものの、間髪入れずに返された声音の厳しさにシャリは口を噤む。

「冗談はさておき。シャリ、……私はターブの山越えルートでは隣国へ行けません。

こちら側があちらを恨んでいる様に、あちら側にも私の顔を覚えている者がいるでしょうから。

一緒に行けない場所があるからこそ、余計に心配なのです。そんな私の気持ちは分かって頂けますね？」

先程の目はかなり本気の色だった様な気がしたのだが……。とりあえずゴトルーが心配してくれているのは本当だろうと、シヤリは頷く。

「それ以外の場所へは私もお付き合いします。やはり予め方向くらい分かるといいのですが、シャリがそれは無理そうだと思うのならば仕方ない。

予算も含めて、すぐに声の方向が分からなくても大丈夫な様に、ニコとビスともよくよく相談しましょう」

それはつまり……、シャリはゴトルーに飛び付いた。

「ゴトルー大好きっ！　ゴトルーと一緒にじゃない時も、ちゃんと約束は守るっ！」

同時にシャリの頭の上へと、ゴトルーの気掛りそうな吐息が降っ

て来る。

「シャリ。睡眠だけではなく、貴女を一人にすると食べる事も後回しにしそうなのが怖い。今の時点で既にお座なりになっていて、かなり食べる量が減っています……自覚はありますか？」

「……。……一応」

サッドには申し訳ないと思っているのだが、どうしても声の主を探しに行きたくて。

こうして食べている時間が勿体無く感じられ、食事が喉を通らなかったのだ。

「まず食事です。探索に出るまで、時間を掛けてしっかり食べましょう」

素直に大人しく、シャリは再び首を縦に振ったのだった。

飛来

ずっとシャリは怖かった。

呼び声の主を探しに行く事は、自分からショウプを出て行くという事。

出て行ったら、二度と帰って来るなど言われるかも知れない。

同時にシャリは、悲しかった。

ゴトルーは行くのを許してくれるに違いないと思っていたが、それは一時的とはいえゴトルーから離れる事を意味していたから。

でもゴトルーは可能な限り、シャリと一緒に行くと言ってくれた。長期間付き合わせるなら、ゴトルーの言う様に、方角だけは分かっている方がいい。

確実に探しに出発するのが遅れてしまうから、声の主には申し訳ない反面、勝手に一人で出て行かないで良かったとシャリは思う。

ゴトルーに内心を告げてしまう前に感じていた、焦りや不安が和らいでいたからだ。

そういえばこうしてゆっくり食後のお茶を楽しむのも、久しぶりの様な気がする。

安らぎ、そして変化していない時間がここ最近は少なかった。

そこまで考えて、だから寝ている時ばかり、呼び声は聞こえたのではないかとシャリが思い当たったその時。

『……』

あの呼び声が聞こえて、勢いよく立ち上がり一番近い窓へと駆け寄った。

そしてシャリは心の限り、叫ぶ。

「どこッ？ 私ならここにいるッ！ あなたはどこにいるの……ッ？」

今まで声を感じ取ろうとはしていたものの、こうしてシャリの方から呼び掛けたのは始めてだった。

ゴトルーを始め、食後のひとときを一緒にしていた面々が、驚いて心配そうに寄って来てくれた。

しかし何の反応もなく、届かなかった様だと諦め掛けた時、猛烈な速さで何かが飛び込んで来た……しかも二つも。

『我が姫！！ 我らの呼び声に応えて下さったのですね！！』

『我が姫！！ ああようやくお目に掛る事が出来ました！！』

シャリの目の前に止まったのは、二振りの剣だ。

口々に言葉を伝えて来る姿に茫然とし、次いでシャリは呼び声の主が魔女ではなかった事に、内心落胆する。

しかしそれは口に出さず、まず訂正を入れた。

「我が姫？ ……私、姫ではありません。魔女です」

そんな自分の返事を聞いて、ゴトルーがひくつと苛立ったのをシヤリは感じる。

「我が姫？ この剣がそう言っているのですか……」

こんなに興奮状態の大音量だというのに、どうやらシヤリ以外にこの声は聞こえていないらしい。

『魔女ですとっ？ それは正に我の為の姫という事でありましょう。』

魔剣が愛する女、ああ、やはり貴女は我が姫に間違いないっ！』

『なんですとっ？ では我の為の姫ではないのでありましょうなあ。聖剣が愛する女、ああ、我が姫はいずこに……っ？』

「魔剣に、聖、剣？ 聖女なら、ニコ……」

「ま。待ってシヤリちゃん！ アタシは聖女なんかじゃ……っ」

しかし急激に距離を詰めて来た聖剣を、ついつい反射でニコは手に取ってしまった。

『貴女が、我が姫。ニコ姫っっ』

直に触れれば、シヤリでなくとも剣の声が聞こえる様だ。

「嫌あゝ！！ 止めて！！ アタシは何にも聞こえてないから！
アంతなんかいらないからねっ。」

聖女様は神殿にお籠り下さいとか言われて、シヤリちゃんと引き

離される事になったら冗談じゃないっつ！」

『ニコ姫……』

『おお、我が姫はシャリ姫と仰るのですねっ。さあ、我が姫。我も貴女の手に』

魔剣も更にずずいと近付いて来たが、シャリは首を横に振る。

「……姫ではないです。それに私も、剣は使えないので必要ありません」

『シャリ姫……』

ニコとシャリから拒否され、聖剣と魔剣は悲しげだ。

「ああ、でも。ゴトルーは剣、欲しい？」

そういえば前に、剣がすぐ刃毀れして困っていた。

魔剣というからには丈夫だろうし、どうだろうとシャリは思い付く。

『い、いや我が姫。我は姫に……』

「……シャリがそう仰るなら、ありがたく拝領いたしましょうか」
『こら！ 貴様！ 何をする。我が姫以外が、我に触るな！！』

魔剣はゴトルーから離れようとしている様だが、なかなか抜け出せずにいる。

「私のシャリを我が姫だと？　これ以上、シャリには近付けさせん」

『私の姫で、貴様のではないわっ。貴様こそなんだというのだ、我が姫に馴れ馴れしい！』

「夫だ。こんな剣ごときにシャリの心が煩わされていたとは……全く、腹立たしい」

険悪な雰囲気を見捨て、シャリは嬉しそうに言った。

「やっぱりゴトルーの手にあった方が、絶対に映える」

『むっ？　真ですか、我が姫よ？』

「はい。ますます輝いて見えます」

『ふむ、仕方ない。我が姫がそう仰せなら、我を貴様の手に預けるとするか』

それを見たニコがニヤリと笑い。

「私も聖剣はパスね、……ビスにつ！」

「なっ！　俺もいらん！　自分がいらんからといって、人に押し付けるな！」

「聖剣なのよ！　聖女は神殿に籠らされるけど、聖騎士はそんな事ないでしょ！　ほら、ビスっ、男らしくさっさと受け取って！」

「……聖騎士、か」

その言葉にビスは心惹かれるものがあつたらしい。

嫌々な風を装ってはいたが、結局柄に手を伸ばした。

『ニコ姫！　いかがですか、我が姫よっ？　我もこやつめの手にあ

ると輝いておりますかっ?』

「う、まだ声が……じゃなくてっ。うん、いい! とってもいい! すっごくキラキラしてるゝっっ」

「……。……よく言うな、ニコ」

こうしてゴトルーは魔剣の、ビスは聖剣の使い手となったのだった。

「これで呼び声探索はせずに済みましたが、私は少々王都へ行ってきます。

この剣共の存在が国に後から露見でもして、剣の力で謀反を企てているのでは等と痛くもない腹を探られるのはごめんですから」

ゴトルーが懸念するのは当然だ。

二振りの剣を報告しなかったら、わざと隠していたのではないかと国は疑って来るに違いない。

そしてシャリがショウプにいないければ、剣達はこの地に飛んで来る事はなかっただろう。

その責任は取らなくてはいけない。

「それなら私も……」

しかしゴトルーは首を横に振った。

「魔剣はいくらでも没収されて構いませんが、一緒に行ったが最後貴女ごと国へ寄越せ返せと言われたら敵いません。貴女はニコと

ここに残って下さい、この家に」

「……」

『何だと、貴様……！　しかし無駄だぞ！　我は我が姫の気配を完全に覚えたからなっ。』

例え貴様がどんなに我と姫を引き離そうとも、すぐに飛び戻ってやるわっ』

「ほう？　その察知力は使えるな。……だそうなので、こっそり付いて来るのみなしですよ、シャリ」

「……」

魔剣が覚えた気配は元の姿の自分のはずだ。

だから変化すれば、もしかしたら気付かれないかも知れない……
と思ったが、王都へ着くまでに変化が解けない自信はなかったし、
ここまでゴトルーが警戒しているのに、それを推してまで行く気にシャリはなれなかった。

「……魔剣様、聖剣様も。申し訳ありませんが、ゴトルーと行って頂けませんか？　そして一緒に帰って来て下さい。お願いします」

一報だけは王宮に先行させ、ゴトルーとビスはそれぞれ剣を下げ、王都へと出発した。

覗き見

魔剣がシャリの気配を完全に覚えたという言葉は伊達ではないらしく、意識を集中しさえすれば、シャリは剣達が近くになくても意思を交わし合える様になっていた。

しかも王都への道中からも剣達は音や香り付きという、まるでその場にいるかの様な光景をシャリの思考へと送り届けてくれる。

『ふふっ、我らと我が姫の間に貴様ごときでは割り込めんのだっ。貴様、何をする！ 我を壊す気かッ！』

どうやらゴトルーが魔剣をきつく握っている様だ。

ゴトルーと魔剣の仲良さそうな雰囲気、シャリは笑ってしまう事が多々あった。

魔剣聖剣が発見されたとの一報は、王都の上層部に大騒ぎを引き起こしていた。

王都に到着したその日のうちにゴトルーとビスは、近衛騎士に連れられて、最優先で国王への謁見を果たした。

もちろんシャリは、その様子もリアルタイムで見せてもらっていた。

「カジュ。アレといい、魔剣といい、そちは魔に縁があるのだな。何の因果で王族として生まれたのかは知らぬが、余もアレのお陰

でいらぬ苦勞を背負わされた。

全くもって忌々しい。アレは不浄よ、汚らしい存在……」

アレとはシャリの事だ。

王の口から出る魔への嫌悪の数々をシャリは久々に聞いたと、懐かしくさえ思っていたのだが、魔剣としてはそうとは思えなかった様だ。

『おのれっ！ 黙って聞いておれば、我が姫への数々の暴言……許すまじっ』

魔剣が怒りで震え、ガシャガシャと不吉な音が謁見の間に響き渡る。

魔剣の声は聞こえていないのだろうか、その音に気付いた人々が息を飲んだ。

「「やめろっ！……」」

ゴトルーとビスが叫ぶが、魔剣はゴトルーが押さえ付けた鞆から抜け出し、王に向かって飛んで行く。

「駄目っ！」

実際その場にいないと分かってはいたが、思わずシャリは大きな声を出してしまった。

そしてそれと同時に、魔剣の進路を聖剣が塞ぐ。

『耐えるのだ、魔よ。これ以上お立場が悪くなって困るのは、シャリ姫ぞ。その男もそれを思っただけで耐えておるではないか』

『……っ』

動きの止まった魔剣の柄をゴトルーは掴んで、再び鞘へと戻す。
魔剣が鞘に戻されたのを見て、逃げ出し掛けていた王や、重臣達もざわめきは残るものの落ち着き得た。

「陛下、御覧の通り、この魔剣は魔女に懸想しております」

「懸想だと？」

「はい。此度の事は、魔女を貶めたが故に魔剣が暴れたのです。
やはり王宮では少々私の魔を封じる力が弱ってしまう様ですね。
シヨウプでは魔剣がこの様に暴れる事はありませんでしたので。
正直、日々魔剣が暴れては私の体が持たなくなります」

「……」

「やはり魔剣もある以上、シヨウプから離れるのはよくない様です。
シヨウプで私は日々歩き回り、息の掛っていないものはござい
ません。」

魔女と魔剣、合わせて封じるのは難しいと存じますが、幸いビス
殿が聖剣を手に入れました。

聖剣さえ側にあれば、魔を封じる力も強まるでしょう」

同じ様にビスも聖剣の柄を手にし、国王に向かって敬礼した。

「私もゴトルー殿を助け、この聖剣と共にシヨウプの地で魔の力を
封じる所存です、陛下。」

魔女を含め、二振りの剣をショウプに置く事をお許し頂ければ、必ずや御身、引いては我が国へ災いが降り掛るのを防ぎましょう」

謁見に参加した貴族達からも、同意の意見が出始め、王も心を決めた様だ。

どうやら全て無事に収まりそうだと、シャリは詰めていた息を長く吐き出した。

終わり

ゴトルーとビスが二振りの剣と予定通りにとんぼ返りして来た。

安心したシャリはそわそわせず、のんびり散歩へと出る様になり、山からの帰りらしい子供達と出くわした。

シャリに気付いた子供達が駆け足で群がって来る。

「あゝっ！ シャリ様だ!!！」

「わゝいっ！ シャリ様ゝっ！」

「シャリ様、お忙しいの終わりましたか……？」

どうやら、ここ最近シャリの様子が変だと、子供達にまで心配されていたらしい。

「シャリ様っ、これ食べられますかっ？」

「これはっ？」

「こっちはっ？」

「シャリ様っ！」

「「シャリ先生っ!!！」」

「……っ！」

相変わらずの猫姿の為、言葉は出せないが、自分が先生と呼ばれる様になるなど想定外もいいところで驚く。

子供達から次々と採って来たばかりの物を見せられ、シャリは頷

いたり、首を振ったりした。

「シャリ先生！ これとこれ似てるけど、どこが違うんですかっ？」
「もし食べちゃったら、……どうなっちゃうんですか？」

と、終いには是非で答えられない質問まで出る。

しかも、もし元の姿だったとしても「勘で」という答えでは納得してもらえそうにない。

先生（師）と呼ばれるからにはっ、出来る限りの事を……という
思いから、シャリは至急動植物辞典を取り寄せてもらい勉強してい
った。

そうして子供達と遊ぶ事が多くなったある日。

「シャリ先生っ！ シャリ先生みたいに小鳥になって飛んでみたい
！ あたしも魔女になれますかっ？」

「……っ!？」

魔女は、黒だから魔女なのだが……。

よもや魔女になりたいなどと言い出す子まで出て来るとは……。

これがところ変われば品変わるというものののだろうか？

早速シャリは魔女や魔法についての異端本も探してもらえるかどうか、タープの見回りから帰って来たゴトルーに尋ねてみる。

「封じている事になっている以上、その実態に関する知識を得たいからという名目で集められなくはないと思いますが……」

『我が姫っ！ 我が魔剣という事をお忘れではありませんかなっ？』

「？」

ここぞとばかりに口を挟んで来た魔剣に、シャリは首を傾げたのだが……。

『書物など取り寄せずとも、我がお答えします、我が姫。』

そもそも我が姫におかれましては黒という色が持つ意味をご存知ですか？

夜、暗闇、影の色というのはもちろん、黒は吸収の色なのです。

黒という個体でも充分強い色にも関わらず、更に外からどの様な力も取り込める。

魔だけではなく、聖の力もです。

ですから昔は黒を魔ではなく、聖とした国もありました』

その内容に途中からシャリは完全に耳を奪われ、苦々しい表情のゴトルーに微塵も気が付かなかった。

『全く黒を魔とするなど、嘆かわしい限りですな。
ああ講釈が過ぎました。我が姫はどの様な事をお知りになりたい
のでしょうか?』

そうして再び尋ねられた時、シャリは意識をすっかり定めていた。
「魔剣様! 師、とお呼びしてもよろしいで、……っ?!?!?」

ところが言い終わる間もなくシャリは、魔剣を側にいたビスに有
無を言わず押し付けたゴトルーにその場から掻っ攫われて、自室
へと運ばれてしまった。

「ゴトルーっ! 何? 何、す……る???」

そんな突然の行動にシャリの心臓はバクバクである。

するとゴトルーがシャリを下ろし、目の前に膝を着いた。

更には文字通りの怖いくらい真摯な表情をしたゴトルーから、ふ
いに手を取られる。

「シャリ、我が姫」

悪い事などしていないはずだ……と、驚きとは違う意味で心を動
揺させながらシャリは不服を返す。

「ゴトルーまで。私、魔女なのに……」

「男にとって愛する女性はいつまでも姫なのですが……では、我が
魔女。私と生涯を共にして頂けますでしょうか?」

「……。……いいの？　魔女にそんな事、言っていいの？　ゴトルーに言われたら、信じてしまうかも知れないのに。」

私、本当はずっといたかったから。後から遠ざけ様としても無理になる……」

かろうじて言葉だけは疑問形にしたが、シャリはもう信じてしまっている。

ずっと欲しかった夢の様な場所。

黒が居てもいい場所、帰る家。

そして、そこにいる大好きなゴトルー。

涙が滲んで来た、悲しい涙ではなくて、嬉しさから。

「すみませんでした、シャリ。私は夫という言葉に甘えていた様です。」

剣にまで嫉妬して妙な事を言い出したとまた笑われるか、今更どうしたのかと不思議そうにされるくらいだと思っていました。

……ここにいて下さい、愛しいシャリ。ショウプに、この家に、私の側に」

もちろんと頷いて、いつもの様にシャリはゴトルーに抱き付いたのだった。

小話その三

ある夜、魔剣の呼び声に応じて赴いた聖剣が言う。

『我らの力を取り込んで、自他共に消滅させた姫もいたというのに、ここはちっとも殺伐としておらぬな、魔よ』

二振りの剣の側には誰もいない。

『我が姫は我を、師と呼ぶのだ。こんな風に呼ばれるのは始めてで、何ともむず痒い』

『実に楽しそうだ。お主がシャリ姫を我が愛弟子と呼んでいるのを、我は聞いたぞ』

『我が姫は姫と呼んでも、ちいとも手答えがないのだ。』

その点、弟子と呼ぶようになってから、姫自ら我の側に近付いて来てくれる様になった。

その手で我に触れてくれればなお良いのだが……。

聖よ。武力としての我々の出番はないが、こういうのも悪くはないな』

『うむ、悪くない』

過去から現在までの事が胸に去来する。
二振りの剣はしばし穏やかに沈黙した。

先に口を開いたのは聖剣の方だった。

『……しかし何とも憐れな姿よ、魔。お主のこの様な姿を目にする日が来るとは思わなんだ』

『そう思うなら、早う切れ、聖っ！ その為にお主を呼んだのだっ』

魔剣は今、ぐるぐる巻きに縛られ、柱に括り付けられていた。

犯人はもちろんあの忌々しい男、ゴトルーである。

しかも鎖ではなく、なまくらでも切れるただの縄だ。

ちよつとの時間稼ぎが出来ればいいという事だろう、強烈な嫌味を感じる。

現に少し前から、愛らしい姫の声は魔剣がどれほど呼んでも返って来なくなっていた。

熟睡してしまったのか、いやそうではない、きつと……。

『おのれっ！ 我が姫にまたも不埒な真似をつっ』

『ふむ。これもまた一興というものか。我はシャリ姫とお主の関係を羨んでおる。これしきの事、我慢するのだ』

『……こらっ！ 待たぬかつっ』

そうして、ただ語らう為だけに魔剣の所へ来た聖剣は去って行ったのだった。

小話その三（後書き）

これにて、魔女のご主人様は終わりです。
お付き合い下さいまして、ありがとうございました。

少し遡って(前書き)

19 「正体」の付け足し話になる為、被っている部分があります。

少し遡って

ゴトルー殿から、とうとう呼び出しをくらった……。

魔女付き騎士になりたいと宣言した数日後、午後からの鍛錬も終わり、帰ってから何をしようと考えていたニコとビスは、ゴトルー殿から「空いているなら来て欲しい」と言われ、カジユ家の馬車に乗っていた。

使い魔に迂闊に近付き過ぎだと、騎士団のみんなからもう散々言われている。

ついに魔女を封じている当人であるゴトルー殿から直々に注意を受けるのだろうか、それとも……。

お互いに考えている事は同じかも知れないと様子を窺いながらも、カジユ家に着くまでニコとビスは一言も口を利かなかった。

王宮からカジユ家の屋敷まで、それほど時間が掛らなかったせいもある。

屋敷の玄関先では明らかにそわそわした様子の、従僕らしき男性が馬車からニコとビスが降りるのを待っていた。

そして二人を客間へと先導してくれる。

しばらく待っていると、お茶の支度をした女官を連れて、ゴトルー殿が入って来た。

腕には使い魔を抱えている。

二人で立ち上がって迎えると、会釈を返して来たゴトルー殿から、
「楽しんでくれ」
と言われ、またソファアに腰を下ろした。

同じく正面に腰を下ろしたゴトルー殿の腕の中にいる使い魔をつ
い見てしまう。

最近、この存在を本当に使い魔と呼んでいいのか、分からなくな
っていた……。

ただニコもビスも、この存在が絶対に禍々しくはないと心から信
じている。

だからこそ数日前の『魔女付き騎士になりたい』発言になったの
だから。

正直、お互いに同じ赴任地を希望していると知った時は驚いた。

数日前の発言は上の方々にある事ない事暴露して、点数を稼ぐ為
の演技ではないと思うのだが、結局いつも通り使い魔が午前中で
帰ってしまった後は、先程の馬車の中と同様、二人きりで話してい
ない。

全く名前が分からないから、余計に話しづらいっ！
ビスは内心、憤慨する。

でも分かったら分かったで、ついとうっかり口に出してしまうかも知れなかったので、良かったとも言えた。

お茶を入れ終わった女官が下がると、おもむろにゴトルー殿は口を開く。

「ニコ、そしてビス。貴殿等が、決して口外しないと私は信じている」

信じているという言葉のわりに、裏切り者には死を的な気配が潜んでいたのは気のせいだろうか……。

二人でごくりと唾を飲み込む。

すると、使い魔が注意を引こうとするかの様に一声鳴いた。

そしてこの部屋にはそぐわないのではないかと思われる衝立の後ろに消えてしまう。

次に聞こえて来たのは、明らかに着替えている物音だった。

「……っ」

ビスは激しくうろたえて、あわあわと視線を泳がせた。

隠れて服を着るという事は、つまり今……。

ビスの妄想を断ち切るがごとく、ギロンっとゴトルー殿が睨んで来る。

慌ててお茶を飲んでごまかした。

「ゴトルー、お待たせ」

出て来た黒髪の女性を迎えに行き、手を差し伸べたゴトルー殿が低い声音で二人に告げる。

「改めて紹介しよう、シャリエゼーラ様だ」

「もうゴトルー、シャリだってばっ。シャリと呼んで下さい。ご覧の通り、魔女です。隠していて、ごめんなさい」

「シャリ。故意に隠していたわけではないのですから、貴女が謝る必要などないでしょう」

重なった手と手。

そんなシャリとゴトルーのやり取りは、二人が封じる封じられているという関係ではないのだと、ニコとビスに伝えた。

「でも……」

不安げに揺れる黒瞳で、自分達とゴトルー殿を代わる代わる見つめて来る。

拒絶されるのを恐れているのだろう。

そしてそうなくても仕方ないと、目の前の魔女殿は思っているに違いなかった。

見つめて来るその体は、猫や鳥の姿の時にも思っていたが細い。そして表情はそれ以上に心細げだ。

とうとう黙っていられなくなったらしく、ニコが力説する。

「だっっ！ シャリちゃんっ！ やっと名前が分かった！ ア

タシ、魔女付き騎士になれる様に頑張るからっ！ 見ててねっ」

その言葉でニコも魔女殿の名前が分からなかった事に対し、憤っていた事をビスは知った。

「えっ？ あの……今日は使い魔が魔女でもいいのか聞こうと思って、来てもらっただけなの、ですが？ そんなに簡単に決めてしまっていたのですか？ ちゃんと考え直した方が……？」

「もう決めたのっ！ ビスの前でいうのも何だけど、アタシなんとなく猫ちゃんがシャリちゃんじゃないかなあと思ってたから。ああもうっ。俄然、燃えて来た……っ！！」

ニコが飛び付こうとすると、魔女殿はサッとゴトルー殿の後ろに隠れてしまった。

斜め上から睥睨して来るゴトルー殿の後ろまでは、さすがにニコも手を伸ばせない様だ。

だが、ゴトルー殿の後ろからおずおずと顔を覗かせた姿！
非常に可愛らし過ぎる！！

どこが魔なのよつと、ニコなどずきゅーんとハートを打ち抜かれ
ているのが丸分かりだ。

「ゴトルー殿には引っ付くのっ？ シャリちゃん、アタシの事もぎゅうしてっ！」

「……ニコ。貴様はちょっと黙ってろ」

「なによっ、ビス。でもまあ、アンタも言いたい事あるでしょうし

い？」

「……悪いな」

数日前、鍛錬場で魔女に雇われたと言い出したのも、今日アツサリと意思を明示したのもニコで、その真っ直ぐな好意の表し方を少々羨ましく思いながら、ビスは言う。

「俺もニコと同様に、鍛錬場に来る猫がシャリだ……と、……っ」

ニコの様にちゃん付けする柄ではないし、とはいえお前呼ばわりもまずいだろうと、名前のみで呼んだのだが……。

パアツと表情を輝かせて喜ぶシャリよりも何よりも、それとは対照的なゴトルー殿の殺人眼光が恐ろしく、ビスは慌てて言い直す。

「シャリ様だ、と！ ……思っていたから、そこは問題ないのだが。正体を明かす事に抵抗はなかったのか？」

しかし様付けした事でみるみるシャリが萎れたのを見て、ビスは口調だけいつも通りに質問を投げた。

口調はニコもいつも通りだし、様付けならゴトルー殿も許容範囲らしい。

「なかった、とは言えません。でもゴトルーとも相談して、ニコとビスなら大丈夫だと思ったので。

魔女付きが決まってしまってから明かすのでは、申し訳なくて」

猫パンチを食らった時にちゃんと、オカシイと感ぜられて良かった。

こんなに素直で。

そして人を気遣って、正体を明かすという危険も冒す……シャリの優しさ。

どこのどいつだ、魔だと決め付けやがったのはつとビスは憤る。

「鍛錬場でも言ったが、おま……シャリ様が俺達を気に病む必要はない。俺も貴女の騎士になります」

「……。……いいのかな、ゴトルー？」

「いいと思いますよ。良かったですね、シャリ」

「……。ニコ、ビス、ありがとうっ！ ちょっと私、……飛んで来るっ」

踊るような足取りで部屋を横切り、鳥になって、窓から飛び出したシャリ様の目は光っている様に見えた。

だが、シャリ様がなくなると、客間は一気に重圧が掛かった。

掛けて来たゴトルー殿は、自分達の前までゆっくりと歩いて来る。何も悪い事はしてないのに、つい背筋を伸ばしてしまった。

「まず、言っておく。私はシャリをショウプに連れて帰るつもりでいる」

「「はい。それは承知しております！」」

ゴトルー殿がショウプへ帰る事は決定済みだ。
だからこそ赴任先の希望を出したのだ。

「お前達は気付いてない様だが、シャリは共倒れも辞さない相手から狙われる可能性がある」

「なぜです!？」

ニコは聞き返しているが、俺には心当たりがある。

「魔女でありながらも、王族だからでしょうか？」

王位継承権はないに等しいが、王の子として生まれついてしまった事実は変えられない。

王家の汚点と思いながらも、魔女に手を出して万が一王宮に穢れが付いてしまったらまずいと、これまで行動には移さなかった者共が、王都を出る事を好機とするかも知れなかった。

「そうだ。シャリの王族内での印象は最悪だ。だからこそ襲う事を躊躇しないだろう。

更に魔女の滅ぼす力を欲するくらい怨恨を抱く者や、邪魔者を排除しようとする者に攫われる危険もある」

確かにその通りである。

ニコとビスは改めて気を引き締めた。

「それさえなければ、シャリに騎士など必要ない。シャリの足枷になるなら、死を選べ。それが嫌ならシャリが襲って来た相手を殺してでも、貴殿らを助けたいと思える様な存在になっておけ」

と、かなり酷い言われ様をされる。

「だがそうなれば、貴殿等を自害させたのは自分。襲って来た者共に対してさえも、シャリは自分を責めるに違いない。

シャリを傷付けたくなければ、守れ。腕を上げろ。鍛錬と警戒を怠ってはならない。

それが重たいと感じるならば、もう話は進めるな」

その声を背にニコとビスはカジュ家を後にしたのだが……。

ゴトルー殿はシャリ様にべた惚れ、というのが二人のその日一番の感想になった。

少し遡って（後書き）

ましろひ様へ。

頂いたコメントから、こんな感じに膨らみました。
イメージと違っていたら、すみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2254w/>

魔女のご主人様

2011年11月14日19時30分発行